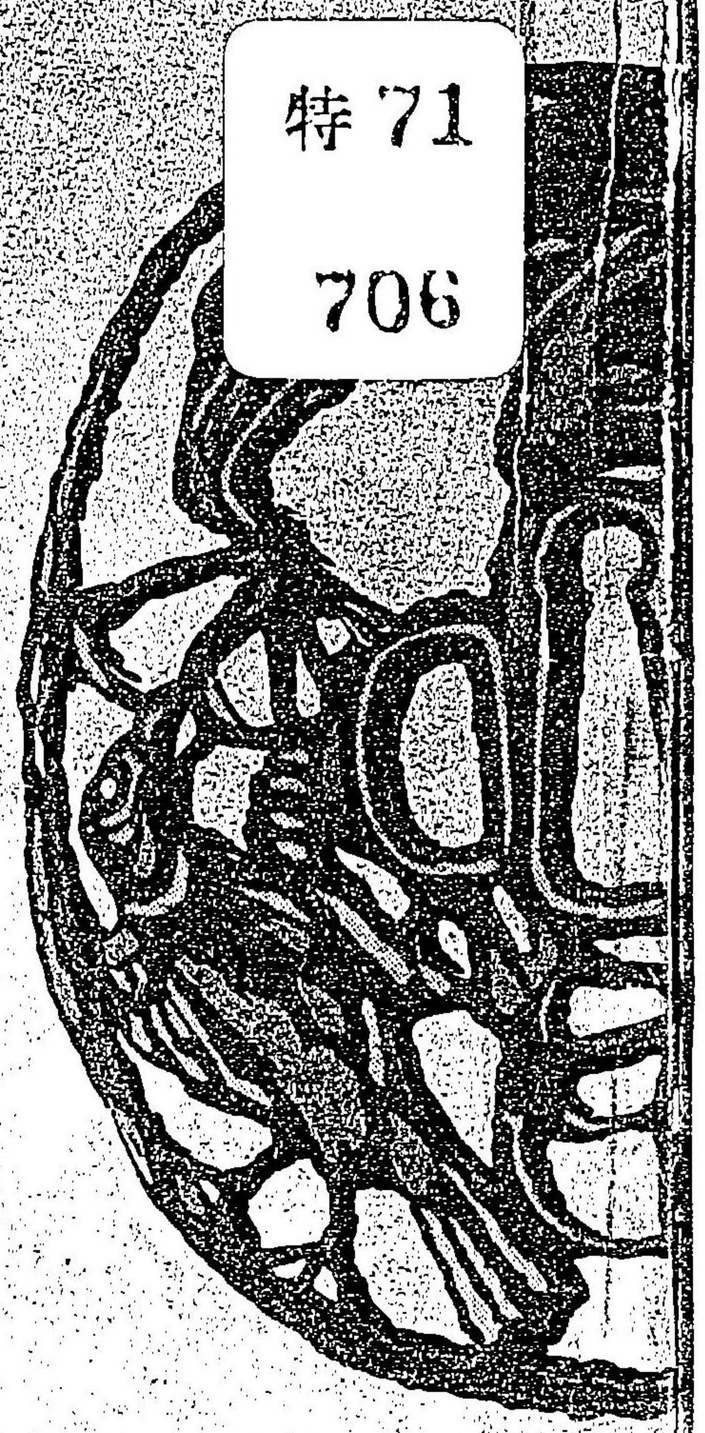
荒木又右衛門

特71
706



264
158

301289-001-

特71-706

荒木又右衛門

一龍斉貞山／講

M43.

DBS-000

龍齋眞山講演

荒木文衛門

東京 厚生堂刊行

明治
43. 7. 18
内交

特71
706

荒木又右衛門

第一席

一龍齋貞山講演

今村次郎速記

厚生堂のお需に依りまして荒木又右衛門義村先生の傳記を講演いたします。

我が日本には古今共に武藝の達人が澤山ございまするが其の中にも此の又右衛門の如きは實に無比絶倫にして荒木前に荒木なく荒木後に荒木なしとまで言はれ前後に荒木に匹敵すべき程の者がないといふくらゐの傑物でございま

す。其の出でるところは荒木攝津守の末葉にして幼名を丑之助といふ。父は大和國荒木田村の豪家にて幼少の頃より寶藏院流槍術の流祖寶藏院覺禪の許に在つて槍術の修業中、大和柾木坂の柳生十兵衛光嚴先生に見出されて其の門下に入り柳生神影流を學び其の奥義を究めて終に十兵衛先生より大身隠れ、水月、天狗生飛切等の妙手を傳へられ師が亡き後に柾木坂の道場を疊んで豫て遺物として賜つたる三池の傳太光世の刀並に中骨十三本表に金龍を現し裏に七賢人を描いたる鐵扇を携へ大和を去つて大阪に出で此所に一年ばかり町道場を開いて土地の俠客喧嘩屋五郎兵衛はじめ多くの門人を取立てたが元より江戸表へ出て仕官をいたす望があるから間もなく道場を疊んで大阪

を出立に及び江戸表を指して進む。道中別段の事もなく勢州桑名へまゐり此所で船へ乘らうといふ考でございます。又右衛門は生來の大酒家で幾ら飲んでも酔つたことがないといふくらゐで飲めば益々勇氣が增し飲みたくなれば居酒屋でも何でも飛込んで桝の隅から引掛ける。船場の向ふに酒屋があるから夫れへ入つて一杯傾けて居ると俄にワーワッといふ騒。何であるかと夫れへ來て見ると年頃二十七八の色の蒼い髯蓬々として居る病人體の武士が破れたる衣類に如何はしい大小を差して荷物を大地に投げ出し兩手を突き頭を下げて頻に詫つて居る。其の周圍には鬼のやうな船頭が七八人船サー勘辨が出來ねエ。尾州樣へ運上になる船だ。先から錢がなけりやアねエと言やア事

に依つたら貰ひ船といふことをしてやらねェものでもねェ。普通の旅人と一緒に乗込んでいよ〳〵船賃といふときに一文もねェから勘辨してくれたア何だ。莫迦にしやアがる。サーやッつけろ〳〵。此んな者を助けて置くと癖になるから引叩いて納めてしまつたが宜い』武『イヤ尤ではあるが船賃だけの貯はあるつもりて乗つたところ何れへ取落したか……』船『喧しいやい。節棒めエ。其んなことを一々言つて無賃で船へ乗られて堪るものか。サー何うするか見ろ』ト大勢で夫れなる武士を打たうとする。又右衛門此の樣子を見て人を押分け中へ入つて又『コレ〳〵何をする』船『何をするッたつてお前さん方の知つた事ぢやアねェ』又『イヤ知つた事であつてもなくても話をしろ』船『強

情な武士だナ。是れはねお武家樣斯ういふ譯だ。此の船は尾州樣へ運上が上るんだ』又『成る程』船『宮から桑名、桑名から宮へ通ふ渡船で七里の海上を渡すんだ』又『夫れは分つて居る』船『ところが此の武士が默つて乗つかつて船賃を取らうといふときになると錢がねェと言ひやがる。おまけに辨當まで食ひやがつて其の勘定も拂はねェで一文もねェから勘辨してくれと斯う言ひやがるんだが何で勘辨が出來るもんぢやねェ。斯ういふ奴も時々あるが其の時には他に仕方がねェから腰の拔ける程打撲つて腹癒せをするといふのが此の船の掟だ。それだから今此の武士も一つ引叩からといふところだ。何うか捨ておくんなせェ』又『イヤ夫れは尤だが然し其のお武家も氣の毒だ。見受

けるところ決して先から船賃を拂はんで乘らうといふ人物でもなささうだ。全く取落しでもして有ると思つたのが無かつたといふのが僞でなからう。シテ賃錢は幾らだ』『船』『六十四文に辨當代が三十六文』又『何かタツタ夫れだけの事で武士たるものを打擲するのか。何うも怪しからんことだ。農工商の上に立つ武士だ。縱ひ浪人をしても大小に對して左樣な不都合を働く法はない』『船』『不都合を働くたつて錢を取らなけりやア此方の方が餘程不都合だ。此んな事を捨てて置いちやア此方等の鼻の下の十萬坪が塞がらねエ』又『何所に十萬坪がある』『船』『へイ』又『へイもないものだ。然し其の方共も稼業にいたして居るものだから謂れなく無賃は乘せられまい。一應此の武士にも尋ねて見る

から其方へ退つて居れ……。アイヤ夫れなるお武家。拙者も浪人であるが失禮ながら大分窶れてお居での御樣子。初から無錢で此の船へ乘る思召でもなかつたらう』『武』誠に斯樣な有樣を御覽に入れ赤面の至りでござる。仰の如く初から無錢を承知いたして乘船をした譯ではござらん。固より多分の貯はなけれども船賃ぐらゐの用意はある心算にて乘込みましたところ今方心著いて見れば夫れがございません。途中に於て取落したものと見えまする。夫れゆゑ種々申譯をいたしたが船頭共が聞入れませんで既に大勢の爲に打擲を受けまするところ……』又『イヤ然うでござるか。失禮ながら何方の御人で……』『武』主家の名前は恥入ることゆゑ申されんが某は中國浪人川田勇吉と申す者

主家浪人をいたし親子三人にて立出でましたところ途中に於て父を失ひ續いて又母も病死をいたし木から落ちた猿同樣。何うか何れへなりと御奉公を爲さんと思へども不幸にして未だ定まる奉公口もこれなく長らくの浪人。かて加へて近頃病の爲に斯の如く難儀いたして居ります』ト言ひながらホロリと落涙をいたす。此の樣子を見て又右衛門　又『ヤ嘘に涙の出るものでない。貧すればこそ武士たる者が落涙をして他人に向つて不幸の物語をいたす。氣の毒千萬な事だ。シテ是れから何れへお越しになる』川『實は中國筋へ參り元の朋友を便つて相談をいたしたならば或は又舊主へ歸參の叶ふこともござらうと覺束なくも中國へ參る途中でござる』又『成る程。是れから中國と申せば

未だ大分先もあることだ。道中いたすに無錢では參られまい。拙者も多分の貯はないが少の持合せの中を尊公へ進上いたす』ト懷中から三兩の金を取出して與へました。勇吉は驚いて　川『何う仕りまして斯樣な大金を始めてお目に掛つた尊公からお惠を受けるといふことはない』又『イヤ〳〵武士は相見互でござる。拙者も亦何日何時災があつてお手前の爲に救はれることがないとは限らん。然し進上いたすと申したらお持ち惡いであらうから一時御用立てをいたす。是れを路銀として故郷へ歸り身を立てて又再會をする時節があつたらばお返し下さい』川『有難う存じます。シテ其の許は……』又『拙者は武術修業の者で荒木又右衛門と申す』川『ハッ。荒木先生と仰しやるか』又『イ

ヤ先生といふ程の身分でもない。今尚修業中の者で……』船『オイ旦那何うしてくれるんだ。早く形を著けておくんなせエ』又『默つて居れ。船賃は拙者が拂つてやる。又辨當の代も拂つて遣はすが拙者も今其の船へ乘るから其の上一緒に遣はすに依つて心配するな……。サー〳〵斯樣な所に長うお居てになると人立ちがして不可ん。早くお出でなさい』川『大きに有難う存じます』ト川田勇吉は喜んで西の方へ立去りました。情は人の爲ならず後に至つて荒木又右衛門が伊賀の上野に於て仇討をいたす時に此の川田勇吉が圖らず力になるといふ是れは後のお話。又右衛門は再び酒屋へ入つて又『モー一ぱい注いてくれ。人を助けると誠に心持が宜い』ト又一德利飲んで勘定を拂ひ又『サ

ー船頭。拙者は是れから宮迄行く。船賃も辨當代も拙者の分と共に拂ふから安心しろ』船『エー旦那がお受合ひ下されば宜しうございます。サー船へお乘んなさい』又右衛門が船へ乘ると乘合の者も大分あつて程なく桑名を出帆し七里の海上幸ひに至極穩で早や二里餘りも來ると船頭が船『エー旦那方。辨當の用意のない方は此所でお取んなさい。是れから未だ間があるから。先方へ著くのは七つか八つぐらゐで……』又『オイ船頭。先刻の武士の食つた辨當は矢張り此の船で賣るのか』船『然うでございます』又『では此所で辨當を求めやシ。乃公は大食だから一本ではとても足りない。二三本くれ』船『恐ろしい大食の人だ。夫れぢやア三本上げませう』又『宜し〳〵。先のともで四本だ

な。殘らず拙者が拂ふ。酒はないか』船『船で酒を賣ることは出來ません。お茶ならございます』又『辨當を賣るからには茶のあるのは當然だ』船『旦那は餘程御酒がお好きでございますね』又『好きとも〳〵酒の匂を嗅ぐとイヤ何うも堪らんナ。乃公は酒の氣が切れたら口を利くのも嫌だ』船『そんなら船へ乘るときに然う仰しやれば宜つた。ては此所に私共の飲む茶がございますからお讓り申しませう……』又『ウム是れは酒だな』船『其んなことを云つちやァ不可ません。他のお客に知れると惡い。私共の飲料に少しばかり取つてあるので……』又『宜し〳〵是れは幾らだ』船『ナニ是れは商ひ物ぢやァねェから幾らでもお心附けで宜うございます』又『然うか』そこで又右衛門茶のつもりで汚い

土瓶で燗をした酒を飲んで辨當を三本平げ快い心持さうにグー〳〵寢てしまつた。此の船が七つ下り、只今の六時頃といふ時分に宮へ著きました。此の船ばかりではない他にも澤山の船が著いて居るから宮の濱邊は混雜をして居る。又右衛門は能く寢て居る　船『旦那〳〵。船が著きました。モシ旦那……』又『アーア。アッ……宜し〳〵。アー何うも宜い心持だ。イヤ御苦勞だつた』又右衛門起上つて悠々と船から上らうとするから船頭が　船『アーモシ旦那。先のお武士の分と貴殿の分と何うか船賃と辨當の勘定をして行つておくんなさい』又『勘定……。其んなものはない』船『戯談言つちやァ不可ません。其んなものはないといふ言葉がありますかい。人の分まで引受けて拂はないで澄

して居られちやア困ります』又『何とても言へ一文もない。夫れで惡ければ先刻の浪人のやうに貴樣達總掛りで乃公を撲れ。醉の醒めないうちに確りと打つてくれ』船『旦那戯談言つちやア不可ません。只の渡船ぢやアございません尾州樣の運上船で……』又『夫れは先刻から度々聞いた。船の中では打ち惡からうから上つて打て』又右衛門笑ひながら船から上つて二三間出掛けると後から來た船頭が船『モシ〳〵お武士。錢を拂つておくんなさい……戯談ぢやアねエ人の分まで引受けて一文も錢がねエで上つて行かれちやア困らねエ』又『イヤ逃げはいたさん。先刻の武士も船賃がないので打つて腹癒せをすると言つた。拙者も何うか打つて貰ひたい。早く打て。何うも此の頃肩が凝つ

て不可んから成るべく肩の方から行つて貰ひたい』ト見張番の所へ來て大小を差置き大道へ坐つてしまつた。是れを見て船頭が怒るまいことか船『此の畜生。大層なことを言ひやがつて彼の武士の勘定まで拂つてやると大きなことを吐して置いて今度は錢がねエから撲れとは太え野郎だ。此んな者は又此の先の道中で何んな事を働くか知れねエから決行つてしまへ』船乙『ウム然うだ。疊んでしまへ』又右衛門の周圍をグルリ取卷いた。又右衛門ニヤ〳〵笑ひながら又『サー始まるかな。是れで濟めば道中は錢入らずだ』船『アレあんなことを言つてやがる。太え奴だ……』又『サー打て。然し打ちやうが惡いと此方でも勘辨がならんぞ』船『脅かすない。尾州樣へ運上になる船だ』又『夫れ

は、モー度々聞いて居る。手向ひはいたさん。船へ乘せて貰つた上に辨當まで食はして貰つたから決して手出しはいたさんが然し度を超えるやうな訂方はしなからうな。只船賃と辨當と酒代だけを打たれやうから何のくらゐ打つか極めて打て』『船』『氣樂なことを吐しやアがる。サー足腰の利かねエ程毆つて勘辨してやらう。ソレやッつける』ト大勢寄つて既に又右衛門を打擲しやうとするところへ ×『少し御免よ〳〵』ト中を押分け入つて來て ×『コレ〳〵船頭。此の人へ無禮があつてはならん……。お武家〳〵』『ハイ』×『拙者は池田宮内少輔家來渡邊靱負と申す者の召使にて山添伊兵衛と申す者。主人此の度江戸表へ參るに就いて先刻あれなる船へ御同船いたした。然るに桑名に於

て一人の浪人を助け何程か金子を惠んでお遣はしなされた樣子を見て主人が失禮ながら感心いたして居つた。然るに只今お見受け申せば船賃と辨當代に差支へ船頭共の手に打擲をお受けなさる樣子』『又』『イヤ先刻の人は助けたが今度は此方の番に相成つた。何うも仕方がない。聊かの貯は先刻の浪人に皆遣つてしまつたのでモー無一物であるから船頭共に打たれて其の價を償はうと思ふ』『伊』『イヤ夫れを主人が認めて如何にもお氣の毒であるから失禮ながら當方で其の船賃はいふに及ばず辨當代も船頭へ遣はしたいと申します』『又』『ハー夫れではお前の御主人が……それは〳〵……。コリヤ船頭共、奇態なものだ。人を助ければ又人に助けられるとある。成る程世の中は斯うなつて居るもの

か。不思議だ〳〵。サー船頭。此の人の御主人が拂つてくれるといふから百兩でも千兩でも勝手に貰へ……』伊兵衛之を聞いて、イヤ大變に大きな事をいふと思つた『又』では何うか拂つてやつて下さい』伊『委細承知いたした』ト最前の浪人の船賃と辨當代に又右衛門の分を合せ船頭へ遣はして『伊』扨お武家。何うか手前と御同道を願ひたい』又『アー左樣か。別に急ぐ用事もないから行つてお目に掛らう……。イヤ船頭大きに世話であつた』大勢の船頭は錢を貰つて何かワイ〳〵言ひながら行つてしまふ。又右衛門は伊兵衛の案内に連れて建場へ來て見ると年齢四十五六、大層立派な武士で供方も大勢居ます『伊』エー御浪人をお連れ申しましてございます』『オ』左樣か……。何うか

是れへ』又『エー始めて御對面申す。拙者は荒木又右衛門と申す者。思ひ掛けなく御配慮に預り千萬辱なう存ずる』『』『イヤ最前桑名の渡場に於て其の許が浪士をお助けなすつて其の難儀を御自分にお引受けになつたのは實に感じ入つたる次第。然るにお貯なき爲に賤しき船頭風情に打擲を受けんとせられるは誠にお氣の毒千萬と存じ甚だ失禮ではあるが家來を遣はしてお助け申した』又『イヤ誠にお志の段有難く心得る。お庇蔭で打擲の辱めを免れた。就いてお立替の金子は早速御返濟いたすべきではあるが只今は一寸小出しがござらん。お見受け申せば貴殿には是れから東へおいでの御樣子。苦しからずば今晩旅籠までお供をいたし其の節御返金いたしたうござるが左樣な都合では

如何なもので……』『イヤ夫れは御念の入つたこと。然らば其の許は失禮なから金子のお貯がござるか』又『固より無一物では道中が出來ません。拙者とても眞逆袖乞をいたす程の者でもござらん。只尾州殿の御威光を笠に被て無錢で乘る者は武士たりとも打擲をいたすなどは自然一般の武士を蔑にいたす基、之を懲さんと存じ態と無法なことを申立てて打擲を受け夫れを種に彼等を取つて押へて嗜めてくれんと心得たるところ尊公御家來を以てお扱ひ下されたに依つてお言葉に從ひ打擲も受けず其の儘に相濟んだる次第』『夫れは恐入つた。誠に面白い御氣性。武士は然うありたいものだ。手前も江戸へ下向いたすに依り寧そ江戸まで御同道いたさうではないか。決して御馳走

はいたさんが道中の賄は拙者一切お引受け申す』又『夫れは千萬辱ない。實は拙者は幾分か貯はあれども是れより江戸へ參つて思ひ込んだ事も少々ある。夫れに就けても先立つは金、成らうことなら道中で多く費ひ捨てたくもない。然らばお言葉に從ひ御厄介に相成るであらう』渡邊の家來傍で之を聞いて、イヤ世の中には臆面のない武士もあつたものだと膽を潰した。そこで是れから又右衛門は渡邊靱負と連立ち江戸を指して乘込むことになつた。

第二席

途中又右衛門は身の來歷や武藝の話などいたしますけれども少しも自慢など

はいたしません。至つて正直な露骨の人物で其の上誠に禮が篤く少からず奥床しいところがある。靱負は思はず良き旅の友を得て鬱を忘れ日ならず江戸表へ乘込み八重洲河岸の池田侯お上屋敷へ到著いたしました。靱負は八百石の身分の人で三年振りで江戸へ歸つたのであるから家内一同の喜悅は一方ならず。妻女を始め當年十六歳の伜の數馬、總領が娘でお民といふなど皆出迎をいたします。靱負は又右衛門を連れて奥の座敷へ通り『扨荒木先生。是れが手前の住居でござる。何うか當分は拙者方にお居で下さるやう。其のうちに道場でもお開きなさるやうなら其の時は及ばずながら御相談相手に相成らう』又『イヤ何うも此の度は道中一方ならん御厄介になり千萬辱なく拙者

口無調法でござるからお禮は充分述べられんが心魂に銘と徹へ有難く心得て居る。此の上とも何分宜しく……』そこで一同へ引合せ銘々挨拶も終つたところへ料理獻立が出て頻に盃を重ねて居るうちに靱負も大分醉が廻つて來て『扨數馬。父の不在中武藝の稽古は怠なくいたしたであらうな』數馬の答を待たず姉のお民が進み出て『仰せの通り數馬は能く武藝の稽古をいたしました。此の頃では切紙になつたと申して大層喜んで居ります』靱『アー然うか。夫れは何うも大分出精である。矢張り井上先生で修業いたして居るか』數『左樣でございます相變らず三番町の井上新五右衛門先生の所へ參つて稽古をして居ります』靱『シテ何のくらゐの腕前になつたか一つ父が試して見た

い……荒木先生。何うか夫れで御見物下さい』『イヤ夫れは結構又右衛門拜見をいたさう。御親子のお立合は又別段に心得る』靭負が斯う言ふのは又右衛門の腕前が見たい爲だ。夫れには自分から題を出して置かねばならない。只又右衛門に竹刀を持つてくれとも言ひ惡いから夫れゆゑ自分が身輕に支度をいたし勿論雙方袋竹刀でございます。姉さんも阿母さんも心配をして阿父さんに負けないやうにと氣を著ける。靭負は既に充分酒が廻つては居るが悴の數馬が乃公を打込んで來るやうなれば又右衛門に對し鼻が高いといふ考でございます。又右衛門は大きな盃でガブリ〳〵酒を飲みながら樣子を見て居る。家内の者は一同數馬に勝たせたいと思つて居ります。軈て左右に立分れ

位取に及んで靭負はピタリ中段に附けると數馬も同じく中段に取つて互に呼吸を計つて居りましたが『エイッ』ト一聲叫んで數馬が打込んで來るところをポン〳〵と靭負は年を老つても流石に磨き上げた腕前へ受流して置いて手許へ入り横に拂つた一刀に數馬はホロリ竹刀を打落され引退らうとするところを肩をピタリ押へられた『靭』コレ數馬。是れが三年の修業の腕前か『數』恐入りました。今一本願ひたいもので……『靭』何本でも來い『二度目に附けたが數馬はモー氣が焦つて居る。相撲を取つても負が込むと固くなりますが劍術も矢張り其の通りで一番負けると今度は乃公が勝たねばならぬと思ふので凝が來る。數馬が上段に打込んで來るのを靭負はポン〳〵と受けて置いて手

許へ入り肩先へ來る奴を數馬は受損じてしまつた　『白痴め。三年の間寢て居たのか。井上先生に就いて修業をして切紙を頂いたなどと何を利いた風なことをいふ。イヤ何うも斯樣に未熟とは思はんであつた。是れは當人の怠つたばかりでない側に附いて居る者も良くない……』阿母さんも姉さんも『ソレ御覽な。お前が油斷をして負を取つたので私達までもお小言を頂戴するではないか』と言はれて數馬は赤面をして涙ぐんで居る。此の樣子を又右衛門目も放たず見て居ましたが、又『イヤ御子息。少々お話いたしたいことがあるから一寸此方へ……』數馬を連れて次の間へ入り　又『今お父上にお負けなすつても決して御心配なさるな。勝つ腕前はあるが失禮ながら未だお年がいか

んから先にお心が著かん。只自分が勝たうくことばかり思つて先方の惡い所へ附け入ることが出來ない。畢竟其所の呼吸を未だお見出しにならないのでお負けなさる。拙者が夫れを敎へて進ぜやう。お父上の劍術は進むの一方で防ぐことのない劍術だ。勿論其の流義にも依るが兎角劍術は進む一方で敵を防ぐことに心を入れん方が多い。尤も進むを專一にする方が上達はする。お父上のは結局良い質の劍術でパッと打込んで來る激しい太刀を若年の其の許が强く受けやうとするから此方の體に亂れが出る。モー些と柔かく受けて御覽じろ』數『ハイ』又『今度はお父上が打込んで來る竹刀を受流し三度四度應つて少しも先方を打たうといふ心を出さない。然うするうちにはお父上の氣が

拔けて打込む勇氣が衰へて來る。お見受け申したところが御酒を召上つて居る故でもあるが左の方に隙がある。依て左から蹈込んで横面をお打ちなされば必ず勝てます』數『有難う存じます』又『今一寸一人で劍術を使つて御覽に入れる……能く御覽じろ。斯うお父上が激しく打込んで來るのを受けつ流しつ應つて先方の頃合を計つて居るうちに必ず左に隙が出る。其所へ蹈込んでおやんなさい』數『有難う存じます』數馬は喜んでイソ〳〵元の席へ歸り數『へイお父上。今一本願ひたう存じます』靱『荒木先生に何か敎つて來たな』數『イエ然うではございませんが縱令敎つたにしても宜いではございませんか』靱『イヤ夫れは敎つても宜しい。一寸敎つて直に覺えられるやうになれば先

づ豪いものだ。今一本相手をいたす』又右衛門も笑ひながら又『イヤ拙者別段數馬殿にお敎へ申した譯ではないが只一寸御助言しただけだ』靱『ハー。一寸御助言ぐらゐのことで私に勝てるやうになれば滿足だが然うは參るまい……サ上來い』ト靱負に於ては前の如く庭前へ立出でて上段に取り數馬は中段に附けた。又右衛門は酒を止めて樣側へ立ち出でて雙方の樣子に目を配つて居る。其のうちに『エイッ』ト叫ぶ聲がして靱負が數馬を望んで打込んで來た。夫れを勢好く受ければ又負けるのだが數馬は今又右衛門に敎つた通りに柔しく體を開いてパッと受け又靱負が打込んで來るのを柔しく受ける。三度四度數馬が柳に風の如く優かに受けつ流しつするうちに靱負は酒の氣はあり年は

老つて居るから次第に息が喘んで來た樣子。時に數馬が左の方に目を注けると成る程荒木先生の言つた通り父の左に充分打込む隙がある。得たりと數馬が飛込んで『御免ッ』ト横面へ打込んだから流石の靭負も『アッ』ト言つてダヂ〳〵と退り『參つた』阿母さんと姉さんとは喜んで『アー今度は立派に勝つた。三年の修業が始めて見えた。數馬が勝つた〳〵』ト猫の兒が始めて鼠を捕つたやうに賞めて居る。靭負は竹刀を投げて『イヤ荒木先生恐入つた。手前の左に亂れがあるといふことは年若の時分から師匠が能く心著けてくれた。夫れを只一度の仕合に依つて拙者の短所を見拔かれ數馬へ御助言なされた爲拙者が遂に負を取つた。貴公の御眼力誠に恐入つた。定めしお腕

前も御名譽のことであらう。何うか拜見を願ひたいものでござる』又『イヤ拙者は別に名譽といふ程の腕でもござらんが折角のことであるから師匠柳生十兵衛先生がお仕込み下された形を二三本御意に任せて御覽に入れやう』そこで又右衛門立上り靭負が差置いた袋竹刀を取り柳生流表裏の形を使つて見せた。只打合を達者にする人は幾らもあるが形を確に使ふことは眞正の修業をした者でなければ出來ません。されば武藝者を抱へるには竹刀打を見たばかりで抱へると買被りがあるが形を見て抱へれば買被りがないといふ。丁度馬乘りの先生を抱へるに責馬をさせたり遠乘りをさせたりして抱へると買被りが時々あるが馬場を尋常に乘らせて見て抱へれば買被りがないといふのと同

じ道理でございます。靭負は又右衛門の形を見て感服し『何うか是れからは數馬に指南を願ひたい』『又』斯樣御厄介になつて居るからは最と易いことだが大橋流の手蹟を修業して御家流に變へると誠に工合が惡いもので筆も大橋で用ゐるものと御家流で使ふ筆とは全く違ふ。夫れと同じことで武藝も一刀流と神影流とは竹刀からして造へが違ふ。今まで井上先生で御修業をなすつたのが茲で手前の柳生流に移るといふと素人になる。御當人も甚だ御難儀であるから何うか相變らず井上先生へお通ひなすつてお歸りになつたら手前がお相手をいたさう。雨霰雪や氷と隔つれど落つれば同じ谷川の水で一刀流でも神影流でも極意に變りはない。工合の惡いところは拙者が又及ばずながら

お敎へもいたす』『靭』『成る程御尤でござる』其の日は道中の疲勞もあるから宜い加減に酒を切り上げました。是れから數馬は相變らず三番町の井上甚五右衛門の所へ稽古に行き歸つて來ると一息吐いて又右衛門に敎る。尤も劍術ばかりではない弓も馬も學問もしなければならないから隨分多忙の身體でございます。然し之が爲に數馬の藝はズツと進んで來る。井上先生も此の數馬は何うも溫順しい劍術だが少し忌な質があるから上達が遲からうと思つて居たが昨今メツキリと進んで來たから何うしても自分でやらうといふ心が出ると豪義なものだ尤も此の頃刀法に妙な癖が附いたが大分工合が進んで來たなどと斯う考へて居りました。或る時靭負が又右衛門に對つて『ときに貴公

は是れから何ういふ方向を取りなさる思召だ』又『左様。師匠十兵衛殿の遺言が三箇條ござる。其の第一箇條は今茲でお話が出來兼ねるが第二箇條は江戸へ出て身を立てるには良い主人を選んで奉公をいたせ。主從は三世といふくらゐのもので一旦主と仰げば命を捧げるのであるから此の御方なれば貴重の命を投げ出しても宜いといふ見込を附けて仕へるやういたせ。尤も公儀御直參に召出されれば夫れに越したことはない。恐れ入つたことながら征夷大將軍の御直參であれば祿高の多少を論ぜず住み込むが宜いと仰しやつたゆゑ何うか其の御遺言を貫きたく存ずる。夫れから今一つ大切の御遺言がござるが是れも時が至らなければお話は出來ん。そこで差當り何うか町道場を出し弟

子を取つて夫れから運びを著けたうござる』『して見れば當太守へ御推擧申しても御奉公はなさらんか』又『誠に有難いことではござるが當殿樣が如何に御名將でも第一の望を遂げないうちに自分の身を固めては些と不都合のことがござる。就ては町道場を出したらば夫れより手掛りを得て第一の望を達せられるかも知れん。何うか迎もの御盡力に町道場を出す運をお著け下さい。聊か入用の金子も貯へあれば……』『イヤ然ういふことなればお貯の金子は又外にも入用のあるもの。道場の入費は失禮ながら拙者が差出し何所か宜い所を探させませう』ト早速出入の町人共に申附けて相當の所を尋ねさせると麹町三丁目に宜い空地がある。地主へ掛合ふと劍術の道場なれば仔細ない

といふので又右衛門自身行つて見ると誠に宜い所でございますから大いに喜び早速大工の棟梁を呼んで繪圖を引かせて普請を始める。日ならずして立派な道場が出來上つたので夫れへ柳生眞流荒木又右衛門といふ表札を掲げて靭負の方から武助といふ僕を一人附け二人暮しの男世帶。初のうちは些とも弟子入りがないから毎日又右衛門酒ばかり飲んで居る。然るところ茲に麹町五丁目に泥沼勘太夫といふ浪人で武藝者がございます。是れは博奕のカスリなどを取り歩き自らは俠客と稱へて居る。全體俠客といふ名前は斯ういふ者をいふべき名稱ではない。然れども兎角博奕打の親分といふやうな者を以前は俠客といつた。勘太夫も大小を差して居ながら博奕打の類で、尤も喧嘩の仲

人などに立つと何うか斯うか圓く治めるだけの力はあります。勿論無法者であるから夫れを恐れて大抵の者は讓つてしまふといふ態なので。借金の取立などを此の男に賴むと先づ相手を探り見込さへあれば乘込んで行つて之を取り其の割を貰ふといつたやうな事もする。當年五十三歳で乾兒も四五十人ある。此の勘太夫が荒木の道場へ因緣を附けに來たのを固より此んな者に恐れるやうな又右衛門ではないから忽ち取つて押へ散々に懲しめて到頭勘太夫降參をして其の以來乾兒を連れて荒木の道場へ稽古に來るやうになつた。サーて夫れが世間へ知れると泥沼の親分でさへ降參するくらゐの先生だから荒木又右衛門といふ人は大層な先生だといふ評判が盛んに立つて追々門弟が附き其

の實今の柳生飛彈守より腕前は上だなどといふ噂が高くなりました。扨渡邊靱負は又右衛門が心に裏表のない潔白を感じて或る時荒木を呼んで『靱』先づ追々道場も繁昌して結構ではあるが夫れに就いても男の手ばかりでは嘸不自由であらうから家内を持たれたら宜しからう。總て結婚には媒妁といふ者が要る。然し私も斯ういふ手輕を好む性來だから打ち解けてお話をするが實は娘の民である。未だ良縁もなく手許に居るが尊公さは東海道で圖らず面會をしたのも何かの縁、斯う深い交をするやうになるのも前世からの約束であらう。不束ながら女一通りの教はしてある積りであるが何ぞ尊公妻にいたしては下さるまいか』又右衛門之を聞いて又『誠に何うも不束な拙者を

左様にお肩入れは有難いことで決して否やはござらんが只今のところでは御承知の通りの道場何となく殺氣を含んで居ればモツト落著きましたところで頂戴を……』靱『イヤ夫れは約束さへしてあれば今直ぐでなくても宜しい。御勝手の好い時分に迎へて下されば結構である』そこで日を擇んで親戚を集め靱負の別懇の家中の者を媒妁人に頼み盃事が濟む。又右衛門も追々運が向いて來て道場は次第に繁昌をいたします。

第三席

すると兎角下々には口蒼蠅い評判の立つものでして『どうだい此の頃麹町三丁

目に柳生眞流といふ道場が出來た。荒木又右衛門といふ先生だが全體此の柳生流といふのは公方樣の御習ひなさる御流義で昔から江戸に柳生流といふ看板を揚げた武藝者が三人ある。其の中には御指南番の柳生樣からお使者が來て御用があるから來いといふと夫れが山師だから其の晩のうちに道場を閉つて逃げた奴もある。又柳生のお屋敷へ大膽不敵に出掛けて行つてお手打になつた奴もある。夫れに懲りずに又柳生の眞流といふ看板を出した。柳生眞流とは早くいへば柳生の眞物だといふのだ。モー長い間あアやつて毎日ポンポンやつて居るが今に柳生樣から手が入らぬといふのは分らねエぢやねエか』『夫れにはお前。底もあり蓋もあるといふ譯だ。今の柳生の殿樣は恐ろし

い道樂者で親父樣の勘當を受けて暫く屋敷を飛出して日本中を飛んで歩いて居たが元は劍術も一向出來なかつたのが其のうち圖らずアノ荒木といふ人に就いて眞影流を修業した。ところが根が器用であると見えてスッカリ腕を上げ江戸へ歸つて來て大久保彦左衛門の詫言で家へ入ると家督を取る者がないので親父樣が其の勘當を免したんだ。夫れが今の飛彈守といつて公方樣の御指南番だ。ところが其れッきり此の荒木といふ先生へ早くいへば年始暑寒の贈り物もしねエ。飛彈守が若し荒木先生に出遇はなんだならばマー生涯浪人者で終つてしまふところを今御指南番になつて居るのは全く荒木といふ人のお蔭だ。夫れを自分が出世をしたからッて知らん顔をして手紙一本も遣さね

エさいふので荒木先生が腹を立つて江戸へ出て來て今の飛彈守は乃公が教へたんだ。乃公の弟子だ。柳生流は神影流から出たもので其の神影流は乃公の方が飛彈守より家元だといふので柳生流といふ看板を出した。元々師匠さんだから手を附けることが出來ねエ。夫れで打捨つて置くんだ』△『成る程然ういふ理由か。シテ見ると豪ひ人だな』×『豪いにも何にも夫れは素敵に強い大先生だ』などと知つた態をして饒舌り立てるのを夫れから夫れと段々風聞する。柳生家にても初の中は又例の山師であらうと御捨置きになつたが段々御家來が取調べて見ると尋常の者でない。正に柳生十兵衛光嚴先生の門人にして池田家の渡邊靭負の世話で道場を開き云々といふことが知れました。そこ

て又右衛門へ對し木挽町の柳生家へ出頭すべき趣の御沙汰があつた。又右衛門大いに喜び扨はいよ〳〵我が大望成就の時が來たと翌朝身を清淨にして神棚へ向つて拜を遂げ例も朝酒を飲む人が今朝は一滴も飲まず御飯を喫し衣類を改め三池の傳太光世の鍛へたる刀を帶し鄕の吉範の鍛へた師匠十兵衛公の御遺物の鐵扇を持つて柳生家へ出頭いたした。扨飛彈守は一應又右衛門の樣子を見ると一見したばかりでも其の人格は大概分る。そこで又右衛門を御道場へ入れてピタリ閉て切り人の立ち入らんやうにいたして飛彈守宗冬『荒木又右衛門義村といふは其の方か』又『ハヽッ』飛『其の方麹町三丁目に柳生眞流の看板を上げ多くの門人を取立て居るやう承知致すが夫れに相違ないか』

『又』ハヽッ。夫れに毛頭相違ございません』飛『シテ其の方は何人より柳生流の傳授を受けた』又『恐れながら柳生十兵衛光嚴公に十六歳の折南都寶藏院覺禪坊胤榮の許でお目通りをいたした砌師の覺禪より許されて十兵衛公に從ひ大和國柾木坂へ罷り越し長らく御側に事へてお手づから御指南に預り二十一歳のとき免許皆傳と相成り其の時荒木又右衛門と改名いたしました。幼名は丑之助と申しました』飛『扨は其の方兄十兵衛光嚴殿の取立を得て免許皆傳に至つたか。然らば汝は柳生眞流の達人であらうから此の場に於て法定四本の太刀を見たく思ふ』又『畏りましてございます。尚十兵衛先生の御遺言もございますればお目通り叶ひましたる上で申上げたく心得で居りましたところ今

日御召出しに預り此の上もなき大慶にございます』そこで飛彈守のお相手をなし法定四本の太刀並に十兵衛殿御工夫の秘法を申上げる。此の秘法といふは劍術の形であるから口で饒舌つたところが充分に之を現はす譯にはまゐりませんから省略いたします。若し御覽になりたければ貞山の宅までお出でになれば使つて御覽に入れる。尤も餘り當にはならないが。暫く經つとトントンと内から戸を叩く音がするので明けて見ると飛彈守も又右衛門も髪が切れ悉く亂髪となつて居ります。其のうちお召替になつて御梳上げをいたす。又右衛門へも召物を下され是れ又髪を取上げ暫時休息をいたして居る。然るに今日柳生殿が又右衛門をお召寄せになるといふのを聞いたお大名お旗本衆

は多分其の仕合い見物が出來るものと思召して柳生のお屋敷へ出張つて居た方が澤山ある。ところが其の仕合は見ることが出來なかつたが天晴腕前の者ということを承つて何れも感心いたし何うか然ういふ武藝者を家來にしたいと諸大名から續々と申込まれた中に播州姫路の城主十八萬石本多大内記殿に縁あつて五百石で召抱へられることに相成り麹町の道場を引拂ひ家來の北堂武右衛門を連れて本多家へ參り新規お長屋を頂戴して是れへ住込みました。そこで豫て約束になつて居りますから靭負の娘お民を妻に迎へ夫婦仲も睦じく一年の間江戸に居たが翌年殿樣がお國表へ御歸國になるに就いて又右衛門始めてのお國入のことゆゑお供をすることになつて妻のお民は一先づ實家へ

預けて國表へ參つたところ益々又右衛門の評判好く御來中一般の者が皆又右衛門に就いて稽古をいたし其の外近郷近在の郷士名主などが劍術修業に來るやうになりました。ところが茲に江戸表池田宮内少輔忠雄公のお屋敷に一つの騷動が出來した。夫れを此所で搔摘んで申上げます。此の池田家に河合半左衛門といふ者がある。元上總國小瀧の城主十八萬石本多出雲守の家來であつたが性來俗にいふ違亂といふ奴で詰らん事をムラ〳〵として人と爭をすることなどが屢々あります。同藩の井上文治右衛門といふ者を聊かの間違から切つて捨て屋敷を飛出して折柄通行の池田宮内少輔の行列中へ逃込みました。事情を聞いて氣の毒に思召した池田忠雄公は家來の渡邊靭負に命じて扱

を入れましたるところ出雲守も家康公のお孫に當る池田公のお扱ゆゑ辭む譯にもならず半左衛門は妻子ぐるみ池田家へ引渡し改めて半左衛門は五百石を以て池田家へお召抱になつた。されば半左衛門は其の恩に感じて主君へは忠勤を盡し渡邊靱負は兄の如くに思ひ自分に又五郎といふ悴があり靱負に數馬といふ悴があるから此の兩人を行々は兄弟として永く親戚の交をしたいといふ望。又五郎には劍術槍術を仕込み學問もいたさせ却々立派な者に出來上りさうに見える。數馬も亦之に負けまいと一生懸命に勵んで居るから誠に良い友と思つて靱負も喜んで居ります。然るに此の河合の家には祖先より傳はるところの正宗の名刀がある。實は門弟村正の鍛へた刀で上總妙見山の池

の中から引上げ河合正宗と號して家の寶としてある。此の名刀を半左衛門が靱負に恩を受けた禮として贈らうといふのを靱負に於ては折角河合家の寶となつて居るものだからと辭退したが强てといふので夫れでは兎も角も頂戴はいたさうが何うか暫く尊公のお手許に預つて置いて貰ひたいと言ふ。夫れではと半左衛門から預り證文を靱負に渡し刀は自分の家に大切に藏ひ置いた。然るに其の翌年半左衛門病に罹り命旦夕に迫つたとき靱負を枕邊へ招いて悴又五郎の身の上を吳々も賴んで往生を遂げ又五郎が其の家督を繼いで五百石の身分となつた。そこで又五郎が眞面目に御奉公をすれば天晴家を興し名を揚げることも出來たらうが父死後一週忌も經たぬうちに不圖吉原通ひを始め

其の頃旗本には白柄組、黒柄組、大小神祇組、金銀入歯組など稱へて大層派手な姿をして頻に遊廓へ浮かれ込み市中を傍若無人に往來して町人を驚かせ又は大名衆へ楯を突くといふやうな事が行はれました。又五郎は自分は身分ある家柄ではあるが陪臣だ。それが天下のお旗本と交際が出來るのは結構だといつて旗本の次男三男などの道樂者に打混つて放蕩をいたし段々親が丹誠をして貯へた金を使ひ失し徐々品物へ手を掛け目ぼしい物は皆取り出すやうになつたのを靭負が聞いて餘所ながら意見をしたが却々當人聞き入れる樣子もなく果は先祖傳來の佛壇へ手を掛けるやうになつたから靭負も最早捨て置くことが出來ない。此の分にては河合家重代の正宗も失ふやうな事があつ

てはならんから此方へ取戻して置かうと又五郎を呼んで其の事を話すとモー此の時既に他へ賣つてしまつて手許にない。絶體絶命信亂といふ僞物鍛治の名人に賴んでタツタ三兩で僞物を鍛つて貰ひ之を持込んで靭負の目を眩さうとした。靭負は一目見て直に夫れと知つたが事を荒立てたら又無分別でもするだらうと怒を呑んで何所までも知らぬ態して右の僞物を手許へ納めて置いた。夫れを知らない仲の數馬が眞物と思つて親父に無斷で持出して御指南番の木村庄左衛門が名刀試しの席へ持參をしたのを同席に居た又五郎が見て是れは大變、此奴を試されたら僞物といふことが露顯をすると驚き慌てて我が家へ立歸つて來ると折柄渡邊靭負が來合して居た。是れは必定露顯をして掛

合に來られたものと早合點をして又五郎突然一室に飛込んで渡邊靭負を不意打にして其のまま逐電をなし兼て知合の三番町の旗本阿郎四郎五郎の屋敷へ逃込みました。前に述べた通り當時旗本と大名との間が誠に穏でない。何か事があつたら大名を凹ましてやらう〳〵と思つて居る連中であるからテント面白しで此の河合又五郎を隠匿ふのみならず池田家へ人質として取られた又五郎の阿母を欺いて阿部方まで連出し飽くまでも池田家へ對して喧嘩を仕掛けました。之が爲に大名と旗本との間に葛藤を生じ一時は天下の大亂をも惹起さんばかりの騒と相成りました。此の騒動を巨細に申上げまするとまた〳〵長編になりますから省略いたします。そこで河合又五郎を江戸表に置いては危

いといふので之を大勢の武藝者に護衛をさして肥後の人吉へ送ることになつた。渡邊數馬は主家へ仇討出立の儀を願ひ出でましたが是れは速にお許しになり就いては姉婿に當りまする荒木又右衛門に助太刀の儀を頼む。又右衛門固より辭むべきでございません早速承知をいたしたが然し公然夫れを言ひ立つて主家へお暇を願ふ譯にはまゐりませんから是れは武藝修業の爲に五箇年間のお暇を願ひ出すことにいたしました。

第四席

そこで又右衛門より大内記殿へ對して未だ武藝未熟に就き五箇年のお暇を頂

き諸國修業の上歸參に及びたいといふお暇願を差出しました。大内記殿に於ては御家老を召して御相談に相成りましたが平素の又右衛門の行爲と此のお暇願とは大層齟齬いたして居ります。又右衛門は常は廣言をいたし天下の中に目に餘る武藝者はないやうに申して居る。然るに今武藝未熟に就きこいふのは訝しい話だ。彼がお暇を願ひ出てたるには何か仔細があるに違ひないといふので其の後又右衛門が御前へ出たときに大内記殿が大『又右衛門。其の方は此の度暇をくれいと申す趣だが年限を切つての修業とあれば隨分聞屆けて遣はさんものでもないが夫れに就ては余に柳生流の皆傳を讓りくれよ。さすれば望の通り年限を切つて修業の爲暇を遣はすであらう』又『恐れながら

又右衛門は縱ひ仰せなくとも我が君極意皆傳の腕前にお進みあそばせば皆傳を仕りまするが失禮ながら我が君の御手の内は未だ皆傳といふまでに御上達なさいません。極意皆傳と申すは僅に一言か二言の中にございます。未だ眞實其の域に上達なさらんうちに皆傳を免しまして也只秘密を洩しますのみで其の甲斐がございません』大『ウム。然らば余は未だ未熟であるな。夫れならば其の方余が皆傳の腕に相成るまで修業に出づる儀は控へて指南いたしくれよ。余に柳生流の極意を許さば其の時こそ望に依り暇を取らせる。魚心あれば水心、痛ければ放すといふことを存じて居るか』又『ハッハ』大『先づ〳〵今日は暇の儀は兎も角として指南をいたしくれよ』そこで平日の通り相變らず

御指南を申し上げる。毎日斯様な有様でサッパリお暇の御沙汰が出ません。何うも敵討を控へて居る身體だから一日も早くお暇を頂かんと不都合だ。縱ひ旗本が又五郎を匿つて置く所が知れても先方にもソレ〳〵用心があることだから何所に河合が居る、サー行つて討たうといふやうな手輕の譯には行きませんので思圖〳〵して時機を外すと困ると又右衛門も當惑をして居ます。夫れから四五日經つと大内記殿が大『又右衛門。余が皆傳を受けるには何のくらゐまで上達いたせば宜いのであるか夫れは余自身にも分らんが全體上達といふものは何うも目立つて分るものでないな』又『左樣なら斯樣いたしませう。我が君が此の又右衛門を不意打にても宜しうございますから一度お打ち

あそばしましたら極意皆傳を仕りませう』大『ウム。夫れは面白い事だ。不意打欺し打などでも宜いのか』又『御意にございます。武藝者は不意打欺し打をされるやうなことではなりません。眞劍なれば生命を取られます。されば私が我が君の爲に打れて閉口いたしますれば直に極意をお讓り申します』大『宜い〳〵。然ういふことならば此方にも工風の仕樣がある。今日も平素の通り指南をしてくれよ』又『畏りました』ト御指南をして退つて來る。其の後で御近習の心利いたる者を大内記殿がお呼びなすつて大『明日又右衛門が出仕いたしたら彼の高慢の鼻を挫いてくれん』近『左樣でございますか。夫れには何とか好い御工風がございますか』大『此の唐紙の所へ彼が毎日平伏をして余の

機嫌を聞くから明日參つて例の通り平伏をいたしたら其の方共不意に左右から唐紙を閉つて又右衛門の頭を唐紙で挾むのだ』近『夫れは何うも面白うございます』大『余が自身に手を下すのではないが余が工風いたして家來に手を下させるのだから勿論仔細あるまい。又右衛門も是れには閉口いたすであらう。明日は必ず抜からぬやういたせ』近『委細心得ました』大『誰が其の掛になるか能く取り極めて今日の中に唐紙を閉める稽古をいたして置け』近『承知仕りました』翌日になると大内記殿が　大『左馬次、鐵彌。何うぢや今日唐紙閉めの掛は定まつたか』左『極りましてございます。正に旨く閉め込みまする心算にございます』大『宜し〳〵。悟られではならんぞ。モー今に又右衛門が參るで

あらう』ト手ぐすね引いて待つて居られます。斯ることは夢にも知らぬ荒木先生出仕に及び例もの通りお閾の所へ低頭平身して　又『麗はしき體を拜し恐悦至極に存じまする』ト兩手を突いて平伏するところを左右から『ヤッ』ト聲を掛けて若侍がスーッ。ところが不思儀なるかな又右衛門の頭の傍まで其の唐紙が來ると動きません。大内記殿驚いて　大『こりや何うだ』又右衛門ニッコリいたし　又『今日はお戯れでございますな。荒木又右衛門は却々唐紙閉めには相成りません。是れを御覽下さい』ト言ふから大内記殿始め一同能く〳〵見ると平伏をするときにお閾の溝へ鐵扇が入れてありますから之が支へて唐紙が動きません　又『是れが柳生流の大身隠れの傳にございます。今日

はお戯れのお心持なれば御指南をいたしても充分に御會得になりますまい。お稽古は明日にいたします』ト其のまま退つた。其の翌日又右衛門が出勤をするとお床の間に巨勢の金岡の畫いた山水のお掛軸が掛つてございます。又右衛門先生は優にやさしく書畫を大層好まれますからヒョイと床の間を見ると誠に結構なる山水が掛つて居るので前へ進んで拜見をいたして居ります。スルト大内記殿が其所へソッとお出でなすつて又右衛門の見惚れて居る後から木太刀を持つてエイッと打つて掛るを又右衛門はヒラリと其の下を搔潜つたる早技飛鳥の如く 又『イヤ我が君。まだ〳〵其の呼吸では又右衛門をお打ちにはなれません。只今不意にお打込みになつたる木剣の下を潜りまして右

へ拔け我が君の後へ參りましたのは是れ卽ち水月の極意でございます。之を御會得あそばさなければなりません。試みに御近習を我が君の代りにお使ひになり我が君が又右衛門にお成りあそばし掛軸に見惚れて居る後から御近習に不意打をおさせあそばして御覽じろ。右に轉して後へ拔ける此のお懸引が出來ますれば私が皆傳をいたします。然しなか〳〵此の技は未だお出來あそばしますまい』大『ウーム……』大内記殿焦慮くつて堪へなれない。夫れも宜いが又右衛門が此の節無禮になつて殿樣の御前へ出ても『アアー』ト大欠伸をしたり、座つてるかと思ふと足を投げ出したり擦つたりする。御近習共が餘り無禮であるからお咎めあそばすやう申上げると大内記殿が 大『イヤ〳〵

又右衛門一人は無禮を許す。何か彼は心中に考があるに相違ない』ト仰しやつてお咎めもなさらんが何うしても皆傳を許さなければ暇をやらんといふ思召。又右衛門は皆傳をせずにお暇を貰はうといふ了見。兩方とも意地に成つて居ります。一方に於て數馬等は少しも早く敵討に出立をしたいが又右衛門は何うしたのだかと心配をして居る。其のうちに十二月と相成り今日は朝からの大雪で見る〳〵うちに銀世界となりましたから 大『今日は天守の櫓に於て雪見をいたす。酒宴の支度をしろ』播州姫路の城は羽柴筑前守秀吉が中國の探題職を仰せ付けられた時姫路に一城を築き五重の天守を造りました。是れは今でも其の儘に殘つて居ります。五重の一番上は餘り高過ぎるから三

重目を掃除いたし夫れへ金屏風を立て毛氈を敷き詰めました。此の毛氈を敷き詰めるといふのは見るものが白い雪だから目が霞んで毒だといふので目を養ふ爲でございます。山海の珍味を列べてお酒宴が始りまするこ大内記殿には 大『又右衛門が出仕したら早速此所へ通せ。而して彼は大酒家であるから充分酒を強ひて醉はせるやういたせ』△『畏りました』ところへ又右衛門が出仕いたしました 大『オヽ又右衛門か。是れへ進め。近年の大雪だ。何うぢや好い眺であらう』又『これは〳〵始めて天守へ登りました。イヤ豆粒のやうな人間が往來して居るのが見えます。實に繪に描いたやうでございます』大『どうぢや又右衛門。此の大盃で飲め』又『有難く頂戴いたしまする』五合入りの

お盃で若侍が酌をしてくれる。グーッと引掛けると又酌をする。又グーッと息つぎなしに飲む　大『コレ又右衛門。余は大酒はいたさんが是れに居列ぶ者は皆選みに選んだ酒家だ。其の方と今日酒戰をさせる。如何に柳生流の名人でも酒の戰には勝てまいナ』又『イヤ是れは面白いことだ。何もお慰でござるからサー〳〵お強いお方。又右衛門の向ふへ廻つて此の大盃を以て酒戰を催しませう』夫れから盃の遣り取りを始めたが五合入りといへば六杯飲めば三升だ。大酒家といつても四五杯も續けて傾ければ大抵の者は酩酊をいたしまする。されば又右衛門に叶ふ者は一人もない。皆へト〳〵になつてしまひました　又『イヤ各位降參をいたされたかナ。我が君。又右衛門打勝ちまして

ございます。然し私も大分酩酊をいたしましたから今日は是れにて御免を……』大『イヤ待て又右衛門。成る程其の方は強酒だ。我が家に一升五合入りの盃がある。コレ〳〵豫て出して置いた大盃を是れへ。何うぢや美事であらう』又『是れは結構なお盃でございます』大『夫れて一杯飲め』又『頂戴いたします。お注ぎ下さい……』若侍が熱くお燗の出來た銚子を持つて來て注ぐと一つの銚子では足りません。二人掛りで波々と注ぐ　又『然らば此のお盃を頂戴して是れで御免を蒙ります』グーッと酒を引くとツンと鼻へ拔ける　又『是れは今まで頂戴の御酒とは違ひ大層辛うございます』辛い譯だ。大内記殿が何時の間にか御近習に言ひ付け熱燗の酒の中へ唐辛を入れさせて出したのだ。然

し又右衛門は一旦口を著けたのでございますから夫れを見事に頂戴する。カッと眩暈がして額からダラ〳〵汗が出ます　又『イヤ大盃で大分頂きました。アー實に快い心持になつた。酒なくて何の己が櫻かな。少々御免を蒙る。雪の景色は又一段。見渡す限りの銀世界、雪は鷺毛に似て飛んで散亂し人は鶴裳を著て起つて徘徊す……イヤ失禮ながら御免』ト狹間に倚掛つて景色を見て居るうちにグー〳〵といふ鼾　大『又右衛門は寢たな』△『珍らしく先生が醉はれましたと見え大鼾でございます』大『盃盤狼藉だ。器を下げろ』大内記殿は四邊を片付けさせて襷を掛け股立を取り御先祖平八郎様がお用ゐになつた田原彈正の鍛へたる蜻蛉切の名槍を二つ三つ扱いてと思はれたが何しろ目方

が十三貫七百目もあるから持ち切れない。已むを得ず使ひ慣れた御槍をお取寄せになつて鞘を拂ひリユー〳〵と扱きを入れ拔足をして又右衛門の寢て居る所へお進みになつてピタリと槍の穂先を突き付け　大『又右衛門』ト仰しやいました。又右衛門が眼を開くと既に頰先へ槍が來て居る。ハッと思つて左へ身を轉し槍の身を押へて又『是れはしたり我が君。何をあそばします』大『其の方の手の中を試すのだ』又『是れは怪しからん。又右衛門身を轉すこと叶はざりせば此の場にてお手討になり空しく最期を遂げるところであつた。皆傳をいたさんが爲御憤りにて斯る事をあそばしましたか。君臣に辛ければ臣君を見ること敵の如し。既に天正十年六月二日京都本能寺の例に倣ひ今君の

御命を頂きまするに依つて御覺悟あそばせ』ト突然右の槍を手許へ引いた。アッと驚き大内記殿　大『是れは不可ん。戯れだ〳〵』又『イヤ何と仰せられてもお戯れとは存じません』ト耳にも入れず『エイッ』トいふと大内記殿の御槍は手を離れてしまつた。又右衛門は分捕に及んだ槍に扱きを入れ『ヤッ』トいつて殿様へ突掛つて來た。其の槍の勢は大したもので柳生流の劍術こそ出來るが槍は出來まいと思召して居たのが大違ひで繰込み繰出す其の工合、一筋の槍が千筋かと思はれるくらゐ。イヤ一同驚いたの驚かないのぢやない。又右衛門は唐辛酒を飲んで逆上に及んだと見えるソレ取押へろと立騒ぐばかりで却々又右衛門の勢に怖れて近寄ることは出來ません。其のうちに大内記

殿が逃げ出さうとするところを又右衛門エイッと突出す槍、モー身を轉ず暇がない。進退窮つたるところから思はず大内記殿は兩方の手を伸して突掛つて來る槍の千段卷の所を拇指と食指の間へ入れて之を除けられた。夫れが爲に又右衛門の槍は夫れッきり前へ繰出すことが出來ません。そこで又右衛門が槍を其所へ投げ出して　又『ハハッ。只今の御働天晴にございます。眞劍白刃取の極意は卽ち是れでございます。此の上は柳生流御皆傳を仕ります』

大『ナニ皆傳をいたされると』又『如何にも。總て玄妙の技は言ふに言はれず敎ふるに敎へられぬものでございます。今日は我が君の御戯れを幸ひに實地に臨みまして却つて其の妙を現しましたるは誠に大慶に存じ奉る。又右衛門

が御無禮は平に御容赦を願ひます。然し只今の呼吸をお忘れあつてはなりません』大『イヤ滿足ぢや喜ばしい。夫れに就けても驚入つたる其の方の腕前。然るに尙修業の爲暇をくれいといふは……』又『イヤ技に限りはないものでございます。私は四十歳になるまでに今一應眞の妙術を修業いたしたうござる。然る上は我が君は勿論、御家中にも其の術を傳へ本多の家臣は皆腕揃ひであるといふやうにいたしたいと存じます』大『ウム成る程尤ぢや。皆傳いたしくれなば願の通り年限を切つて暇を遣はす』又『ハハッ有難い仕合せにございます。然し我が君のお槍は甚だお筋が惡うございます。是れは御指南番が宜しくない。中さば惡い流儀を只今までお學びあそばしたので惜いことでござ

います。全體槍術のお稽古を申上げたるは何者でございますかナ……。ハハ！御當家の槍の指南番は櫻井甚左衛門。イヤ十八萬石の太守は廣大なもので斯樣な筋の惡い槍術指南番に多くの食祿を下されるといふのは勿體ない。又右衛門の目から見るときは彼が槍は野呂間が鳥を差すやうなものでござる。又彼が弟甚助は大和流の射術を以て御奉公をいたして居るが其の射術は畑の中の案山子同樣でござる。アハ、、、』又右衛門は固より天下無雙の名人でございますが至極謙遜な方で却々他人の藝を誹るやうな人でございません。夫れが斯う惡くいふは又右衛門の心には一つの策略があるのでございます。然るに此の又右衛門の言葉を櫻井の弟子が大内記殿のお側で聞いて居りまし

た。又右衛門の弟子の中にも亦櫻井の弟子がある。即ち又右衛門の方で劍術を敎り櫻井の方で槍を敎り又甚助に騎射を敎るといふのが澤山ございます。

其の中には又右衛門は新參、櫻井兄弟は長く御奉公をして居るから何うしても古い方の肩を持ちたがる者も少くない。そこで翌日櫻井方へ弟子達が來て昨日荒木又右衛門に於ては眞槍を以て我が君にお手向ひをいたし其の申譯に眞劍白刄取の極意をお讓り申したなどと宜い加減の口實を構へて己が無禮の罪を遁れ剩へ先生のことを鳥差し槍術、案山子の騎射などと申しました。成る程劍術では豪うございませうが何の荒木に弓や槍が出來るものではない。先生何うか又右衛門と試合をなすつて彼が高慢の鼻を折つて下さいと勸める

者がある。甚左衛門は聞いて聞かぬ態をして居ましたが弟の甚助が承知をしない『憎い奴だ。兄上。劍術では何うだか知らんが貴所が槍をお執んなすつたらヨモ又右衛門に敗を取ることはございますまい。私も射術を以て又右衛門に蒲公英の矢なりとも食はして我等兄弟の腕を見せてやりたうございます。眞劍白刄取の極意とは何のくらゐ豪いものだか知りませんが私が得意な矢繼早の矢を受留める極意は恐らく柳生流にもございますまい』と言ひます

ると多くの弟子共も之に同じて煽動いたします。實は此の櫻井兄弟は又五郎とは叔父甥の關係がございまして此の時モー長く本多家に居ることが出來なくなつて居ります。といふのは又五郎を匿つて置く阿部四郎五郎から、此の

度河合又五郎を一先づ三州片濱へ遣はすに就いては萬一荒木又右衛門が渡邊數馬の助太刀をして途中に待受けるやうなことがあつてはならん。依て此方でも充分に警固をして參るけれどもお前達は叔父甥の關係もあるから高見の見物もしては居られまい。是非加勢に來てくれといふ沙汰が豫てあるから何うしても參らなければならない。其所へ持ち込んで此の次儀でございますから甚左衛門も大いに考へた。是れは寧そ試合をなし先づ又右衛門を槍にて打敗り尚弟甚助が矢繼早の射術を以て彼の肝膽を寒からしめたならば後日何かの爲非常に好都合であらうといふところから早速試合の儀を甚左衛門から願出た。大内記殿には直に御聞濟みなされ三日間猶豫があつて第四日目に御

城内宗社明神のお馬場で試合といふことになつた。扨當日になると正面に棧敷をしつらへ離れ立葵の御紋の附いた幕を張廻し本多大内記殿お控へになる。續いて家老方を始め御家來衆綺羅星の如くに居列びましたることにて櫻井兄弟は今日を晴れと扮装ち一槍の下に荒木を突伏せん、一矢の下に又右衛門を射伏せんといふ素晴しい意氣組。いよ〳〵茲に試合をいたすことに相成りました。

第五席

扨いよ〳〵試合が始まらうといふ時になつても荒木が來ない。荒木の弟子共

は心配をいたして自宅へ迎ひに行きますと北堂武右衛門が『武』イヤ何うも銚子の數が重つて我等も心配をして居るところでござる。只今申上げます……。エー先生。お迎でございます』又『イヤ苦しうない』武『苦しうないではございません。上には既にお出張りになつてお待兼ねだといふこと。速にお召替あそばしたが宜しうございませう。櫻井兄弟に於ては大層立派に著飾つて參つたさうでございます』又『オー左樣か。乃公は此のまま宜い』武『餘り見苦しうございませう』又『イヤ心配するな。天下の名人荒木又右衛門決して著飾るには及ばん。如何に綺羅美やかに著飾るとも其の技が物の役に立たんければ祿盗人である。木綿の著物も錦の如くに見えるのが武藝の德だ。立派な扮裝

をした櫻井兄弟が此の又右衛門の爲に後れを取つて立歸るときの態を見ろ。ドレ徐々出掛けやうか』武『御飯を……』又『イヤ飯を食ふには及ばん』小倉の袴に小刀を前半に帶挾んで例の鐵扇を携へ三池の傳太光世の太刀を差し一歩は低く一歩は高く蹌々踉々として迎ひに參つた門弟を引連れ高笑をしながら宗社明神のお馬場へ參り休息所へ來ると待受けて居た門弟一同『イヤ先生は大層醉つておいでなすつた。あれでお立合が出來るだらうか』ト心配をして居る。又右衛門は醉つても本性違はず正面の棧敷へ向ひ禮を厚うして再び幕張の内へ入つて來て床几へ腰打掛け試合の刻限の來るのを待つて居ります。其所へ櫻井甚助がニコ〳〵しながら入つて來た『これは〳〵荒木先生。今

日君前に於て試合仰せ付けられ武門の面目に存じます。何卒お手柔かにお立合を願ふ』又『イヤこれは甚助か』突然呼捨てだ。流石の甚助もムッとして又右衛門の面體を睨め著け『先生には餘程御酩酊の御樣子、お立合が出來ますかナ』又『莫迦なことをいはッしやい。下手騎射や野呂間が鳥を差すやうな槍術を相手にいたすのは餘り大人氣なくて酒でも飲まんでは立合が出來ん』『是れは怪しからん御一言。憚りながら甚助が射術の玄妙を御覽に入れるから其の覺悟でお立合なさい』又『イヤ生意氣な事を申すナ。然し其のくらゐなら張合があつて面白い』『然らばお支度をなさい』又『イヤ乃公は是れて宜い』そこで甚助は自己の休息所の幕張の中へ歸つて來て『兄上。何うも呆

れました。又右衛門といふ奴は高慢の爲にチト氣が狂つて居ります』櫻『何ういふ樣子だ』『斯樣々々の次第で實に荒木は憎むべき奴でございます』櫻『然うか』其のうちに掛り太鼓が鞳々と鳴りますると又右衛門は別段支度もいたさず袴の股立を取り例の鐵扇を持つて悠々とお馬場の眞中へ出ました。甚助は太く逞しき河原毛の駒に打跨がり凛々しく扮裝ち弓矢を携へてトー〳〵と乘出しました。全體騎射と申しまするは二三度輪乘を掛けて置いて夫れから駈けながら射るものでございます。甚助馬を乘付けて來て突然鞍壺へ身體を落すと見るうち弓に矢を番へ乘違ひさまヒョーと射た矢は風を生じて飛んで來る。又右衛門急かず騷がず携へ居りまする鐵扇を以てヤッと其の矢を打落

じた。甚助は第一の矢を射損じて少し慌てましたが矢は二本しかない。今度こそはと乙矢を番へて馬が向ふの方へ進んで行くところを後を向返りさまヒョーと射掛けたる其の早技。流石の又右衛門も鐵扇で之を打ち落す暇がなく忽ち面前へ飛んで來た。尤も試合のことでございますから本矢ではありません蒲公英が附いて居る。又右衛門ハッと首を縮めたから其の矢が頭の上を掠めて向ふの方へ飛んで行かうとするところを千鳥の如く體を向直して左の手でサッと掴んだ。見物は一同に思はず『ワッ』ト いふ賞聲を揚げました。甚助は既に乙矢を射拂つて之を受け止められたからモー是非に及ばん馬からヒラリと飛下りて 茫荒木先生恐れ入りました』又『何うだ甚助。之を名づけて案

山子の騎射といふ。案山子といふものは弓矢を持つては居るが實際何も射ることの出來ないものだアハハハ。然し甚助。乃公は劍術使で大弓半弓などは一向手に取つたこともないのであるが總て一藝に達する者は何事によらず其の呼吸を飲み込んで居る。雨霰雪や氷と隔つれど落つれば同じ谷川の氷で皆落つるところは一つである。今度は乃公が一つ貴公の弓矢を借り貴公の眞似をして騎射といふものをやつて見やうと思ふ。甚助、貴公が的になつて今の乃公の位置に立つて見なさい。貴公は商賣人だから二本の矢を受けるぐらゐのことは何でもあるまい。然うしたら勝負は五分としやう。全然顔を潰すのも甚だ氣の毒だから若い者には花を持してやらう』甚助は只さへ敗を

取つて口惜いところへ斯く飽くまでも嘲弄をいたされ何とて後へ引けませうか。それに又右衛門の弓術は何うせ多寡の知れたもの。立つて大弓を射るなれば或は紛れ當りに當ることもあるだらうが馬に乘つて走りながらに射る騎射は却々素人に狙が著くものではない。さうすれば勝負は五分になつて今の耻辱を取返すことが出來ると斯う思つたから『荒木先生のお望み通り此の度は私が的になりませう。然し私は騎射が本職でござるから徒歩では少し勝手がわるい。願はくは馬上に於て先生の矢を除けることにいたしたい』又『貴公は馬の上で矢を除けると言ふか。夫れも至極宜からう。然し馬の上の的を下に居つて射るといふはチト始末が惡いが此方も馬で射る分には仔細ない。

それでは乃公は馬を拜借して騎射をやることにしやう』ト又右衛門御馬役人の所へ行き『又』甚だ恐入つた儀でござるが我が君のお召替を拜借いたしたうござる』大内記殿は御武勇のお方でもあり且お氣に入りの又右衛門のことでもあるから早速お聞濟になつて『又右衛門に馬を貸して遣はせ』トの御沙汰が下つた。然るに何うも世の中は心の許せない恐ろしいもので此の御馬役人には櫻井の弟子が多いから此頃中より又右衛門の廣言を憎く思つて居る。一つ荒木を落馬させて甚助先生と立合の出來んやうにしてやらうといふ相談をいたしました。ところで南部領から出て來た馬で毛面が良いので本多家でお買上げになつた鼓黑と名づける馬がある。是れが恐ろしい癖馬で誰でも彼

でも外足を振つて投り落す。夫れが爲に御馬役人も仕込むことが出來ませず仕方がないから拂下げにでもしやうかといふ相談中でございます。此奴を貸して又右衛門を振り落させてやらうといふので厩から引張り出して馬丁が牽いて來る。馬は鼻嵐といふやつを吹きながら出て來る。そこで甚助は自分の馬に乗る。荒木先生は牽いて來た馬の正面に立つて先づ其の相を見ると恐ろしい癖の強さうな馬だ。然し人を喰ふほどの惡馬でもなく本當に仕込めば隨分役に立つが乘人がヤワだと言ふことを肯かない奴だと見て取つたからヅカヅカと前へ進んで馬の鼻の上を撫でながら睨み著けた。馬も其の樣子を知つたものか不思議に從順くして居る。軈て鬣を取つてヒラリと跨り手綱を締め

ると口を取つて居た馬丁が放れ荒木先生ピタリと腰を下す。馬は其の乘り工合で直に騎者の技を知るものであるから此の人は大變だ若し我儘をすれば何んな酷い目に逢ふか知れないと思つたらしい。全體癖強の馬は口へ甚く當てられるのを誠に嫌ふものだから荒木先生手綱を細かにハイ〳〵パッ〳〵〳〵と出て行く。本多樣には別に馬の先生がございます。甚助は騎射の先生で馬術を教へる人ではない。其の馬の先生達が又右衛門の乘り工合を見て互に目と目を見合せて驚いた。『どうだい荒木は馬も能く乘る』ト感心をして居られる。そこで甚助は先へパッ〳〵〳〵と乘り始める。又右衛門は一向之には構はず地道を三遍乘つて夫れから驅を追ひ始める。甚助は先へ走りなが

ら屈んだり起きたり成るだけ的の狂ふやうにして居る。又右衛門は弓に矢を番へないで只追驅けて居る。甚助は何うしたんだらう未だ始めないと氣を揉んで居る。稍あつて又右衛門が『ハヨーッ』ト馬聲を掛け一際甚助へ近く乘り寄せて置いてヒユーッと一つ弓弦の音をさせました。扨は一の矢が來たと思つたから甚助は鞍壺へ平伏したところを又右衛門が手早く矢を番へて今度は眞の矢をヒユーッと射た。それが蒲公英ではあるけれども龜の尾の邊へ鋭く當つた。アッといふ機會に甚助の乘つた馬が突然飛上つたから堪りません。ツデンドーと落馬に及びました。馬場に居合す人々が驅付けて來て馬を止め甚助を抱き起したところ幸ひ怪我もいたしません。又右衛門は高笑ひをして

又『どうだ案山子先生。又右衛門は貴公の型を見て始めて騎射といふものを行つて見たが格別むづかしいものではない。是れは泰平の慰物だ。戰場で此んなことをして居つては敵を討つわけに行かない。アー面白かつた。先づ甚助。此の勝負は又右衛門が勝だ……イヤ馬丁御苦勞であつた』ト口を取らせてヒラリと飛下り馬の鼻面を撫でて能く乘せてくれたと手綱を鞍へ掛け悠悠として休息所へ引き退りました。大内記殿は只モーお驚きなすつて何うも又右衛門は豪い奴だ。斯る者に暇をやりたくはないが然し彼に何か望がありといふことであれば强て止める譯にもならん。心願成就すれば再び當家へ立歸るやうに改めて屹度申付けなければならんと考へて居られます。暫く休

息をいたしまして又右衛門いよ〳〵此の度は甚左衛門の槍と仕合をいたさうといふ。甚助が不覺を取つたので甚左衛門に於ては一倍勇氣を起し身支度に及び蒲公英の槍を提げ脇差を前半に差して立出でる。又右衛門は同じく股立を高く取上げ是れも脇差だけを差して出る。是れは激しい試合になると長いのは邪魔になるからでございます。雙方馬場の眞中へ出て參りイザ勝負いたさんと二禮なし荒木は木刀を引提げて身體中開けッ放して身構をした。甚左衛門はイデ目に物見せてくれんずと手槍を取直して『ヤッ』ト一聲喚いたと見ると扱きを入れる其の有樣い一筋の槍が千筋にも見えまする。全體槍は突出すよりも繰込みの早いのを名人といたします。又右衛門は甚左衛門の槍の扱

ひを目を放たず見て居りましたが成る程此の人は甚助の射術と違つて餘程出來るワイ。然し何程の事もあるまいと思ひまして『サー來い』ト足を蹈み鳴して又右衛門始めて提げた木刀を中段に構へ鍔隱れといふ型に構へました。甚左衛門も槍を中段に取つて『ヤッ』『エイッ』暫くは雙方矢聲を掛け氣合を計つて居りましたが如何なる隙やありけん甚左衛門が一聲叫んで突出す槍。サしつたりと又右衛門、木刀を以て左へ拂ふ。其の槍を甚左衛門手許へ繰込むかと思ふと又突出す手練の早技宛然稻妻の如く隙間もなしに突込んで來る。尤も是れは眞實に又右衛門を突かうといふのではなく斯くいたして荒木の體の崩れるのを待つて充分に突を入れやうといふ心算。是れは又右衛門に於て

も固より知つて居るから態と木刀を持つて體を崩し只右左へポン〳〵と槍を拂ふばかり。未だ酔が充分醒めないかしてダヂ〳〵と蹌踉くところを得たりや應と甚左衛門、荒木の胸元を突貫く心算にて力を籠めてヤツと繰出したる槍先。是れを又右衛門が受け損ずれば仰向に倒れねばなりません。時に荒木又右衛門は木刀にてポンと其の槍を拂ひ上げた。其の勢で槍が宙に閃くと甚左衛門がはづみで槍を持つたまま浮上つてヨロ〳〵と倒れさうになつた。其所を透さず又右衛門が手許へ跳り込んで『エイッ』ト一聲槍の眞中の所を甚く打つたから堪りません甚左衛門ホロリと槍を取り落した。是れでモー櫻井は負けたのだ。まゐつたと言へば夫れで負けても綺麗なのだが甚左衛門は如何

にも心外でたまらないから槍を打落されると突然帶して居た小劍をギラリと引抜き又右衛門を望んで打込んで來た。見て居る人々は大いに驚いて是れは亂暴千萬だといつたが却々留めることが出來ません。又右衛門は木刀で受拂ひながら次第に後へ〳〵と退つて來る。甚左衛門は無我無中に切込み〳〵前へ進んで來る。大『怪我がないうちに早く留めろ〳〵』ト殿樣のお聲掛りてありまするからお徒士目附が夫れへ驅付けやうとするが甚左衛門の切込み樣も早ければ又右衛門の後へ退り樣も早いから御徒士目附も却々間に合はない。其のうちに又右衛門は段々後へ退つて宗社明神の池の際へ近づいて來た。此の池はなか〳〵深い池で此所には主が住んで居るなどと莫迦な事をいつて居

る者もありますくらゐ。其の池の側まで又右衛門が退つて來てモー後に少しの餘地もない。甚左衛門は逆上をして居ながらもモー荒木の後に餘地のないのを見て甚く勇氣を奮ひ起し跳り込んで一刀の下に切つてしまはんと力を籠めて切込むところを又右衛門に於ては池の際まで來ると突然體を轉して木刀で甚左衛門の腰を甚く引拂つたから堪りません。水煙を立つて甚左衛門池の中へドブーンと落ちた。又右衛門は『アッハ、、、』ト大口開いて打笑ひます門『ソレ甚左衛門先生が池へ落ちられた』ト門弟達が夫れへ驅付け中には水練の心得のある者もございますので池の中へ飛込みヅブ濡となつて甚左衛門を漸う擔ぎ上げました。其のうち又右衛門は大内記殿の棧敷へ向つて一禮な

し悠々と幕の中へ入りますると ドンドーン。甚左衛門は幕の内へ擔ぎ込まれますると チャン〳〵。大内記殿には 大『休息をいたしたら又右衛門を是れへ召せ』ト仰せられる。又右衛門は別段疲れもいたしませんから休息も何も要らない。仕合のままの扮装て直に御前へ罷出でる 大『イヤ日頃の廣言に違はず今日の勝負深く感服をいたした 又『恐れながら只今池の中へ櫻井甚左衛門を打込みましたる那れが即ち眞劍白刃取りの術でございます。此の間御傳授申上げました所と照合せ能く御勘考下さらば御修業の一端とも相成らうかと存じます』大『ウム。其の方は斯くまでの腕を持ちながら尚修業の望があるか』

又『イヤモー武藝は死ぬまでの修業でございます。日本全國には如何なる名

人があるかも知れませんゆゑ是非とも我が邦を一周いたして腕を研きたう存じます』大『左様であるか。然らば強て止めはいたさん。サー盃を遣はす。追て出立の節は再び目通り申付ける』又『有難い仕合せに存じます』又右衛門は上々の首尾、櫻井甚左衛門と甚助とは這々の體で各お長屋へ立歸る。荒木の門弟は師匠の高名に勇み喜んで八方へ甚左衛門甚助の不覺を評判に及ぶ。然るところ阿部四郎五郎の方から櫻井方へ再び密使が來りまして最早河合又五郎を或る所へ差送る支度が出來た。御身等は又五郎身内の者であるから早々兄弟とも來つて警固をいたしてくれられよ。場所は前便にも申した通り三州片濱にて待受けられたし。然るときは其所へ又五郎を差向けるであらう。其

の後の落付く先は面會の上で申入れるといふ沙汰がありました。甚左衛門甚助の兄弟は荒木又右衛門と見苦しき試合をいたし家中の者にも嘲り笑はれ到底此所に留つて居ることは出來ませんから是れを好い機會といたし早速にお暇を願ひました。然し其の行く先を又右衛門に知られては相成らんから先づ竊に大阪へ立退き暫く其所に足を留めて又右衛門を東海道なり中仙道なりへ追出し其の後で徐に大阪を出立いたし三州片濱に於て又五郎を待合さうとの了見で軈てコツソリ大阪へ向け出立いたしました。又右衛門は櫻井兄弟は敵の身内であるから此奴さへ放さないやうにして居れば敵の行衛は自然に知れると思つて居りますので是れも直にお暇を願ひ數馬と其の家來の山添伊兵衛

並に北堂武右衛門を引連れて此所を出立に及びました。

第六席

又右衛門におきましては敵又五郎の消息を知るには何うしても此の櫻井兄弟を取逃してはならんといふ考だから始終其の擧動に注意いたして居りまするうち何時の間にやら兩人とも姿を匿してしまひました。又右衛門はハテ彼等兄弟は何所へ參つたか。まさか江戸へ行く氣遣はないから恐らく大阪へ行つたのであらうと早速義弟數馬、山添伊兵衛、北堂武右衛門の三人を引連れまして大阪へ出て一軒の家を借り又右衛門は毎日々々深編笠に面を包み大阪市

中を歩き廻つて其の行衛を捜しました。斯くて七日ばかりも經ちましたが一向櫻井兄弟に廻り會ひません。然るに或る日ブラリ〳〵と渡邊橋へ掛つて參りまするとと向ふの方から岡持を提げてやつて來ましたのが兼て櫻井兄弟に使はれて居た僕の半平といふ者である。オヤ向ふから半平が來る。恐らく櫻井兄弟は未だ彼に暇は出すまい。これは好い手掛りが出來た。兎も角も跡から尾いて行かうと又右衛門が後から見え隱れに尾いて來るとは夢にも知りませんから軈て半平は大和屋といふ貸席へ入りました。貸席と申しても待合やお茶屋のことではございません。彼の地では貸席といつて座敷を貸す商業がある。チャンと入口も附きまして宛然一軒世帶を持つたやうになつて貸してく

れます。又右衛門は暫く其所に佇んで思案をして居りましたが、是れは普通の聲では不可んと思ひましたから態と音聲を鼻へ掛けました　又『一寸頼む。一寸頼む』ト案内を請ふと『ハイ』ト答へて出て來たのは半平　半『何誰樣でございますか』又『櫻井御兄弟は御在宅か』半『何誰樣でございますか』又『イヤ櫻井御兄弟は御在宅か』半『ハイ何誰樣でございますか。主人は居りまする』又『確とお在宅か』半『ハイ確と居ります』又『慥に居られるな』半『ハイ慥に居られます』又『ウム』徐に紐を解いて被れる深編笠を取つて　又『半平。暫くであつたな』半『オヤこれは荒木先生でございますか。貴所はお人が惡い。鼻くたの聲色などお使ひなさるものだから貴所とは些とも心付きませんでした』

又『乃公だと心付くと櫻井兄弟が居ても居らんなどと僞言を言つて不可ん。依て態と聲を變へて相尋ねたのだ。兄弟は確と居ると只今申したナ』半『ヘイ』又『荒木又右衛門が參つたと取次いでくれ』半『暫く是れにお控へを願ひます』半平は慌てて奥へ駈込んで來まして　半『エー旦那樣。タ、、、大變でございます』櫻『大變とは何だ』半『荒木又右衛門が尋ねて參りました』櫻『ナニ荒木が來た……そりや困る。居ないと言へ。留守だと言へ』半『ところが私が荒木とは心付かんものでございますからツイお在宅だと言つてしまひました』櫻『聲柄でも分りさうなものではないか』半『イエそれが平素の聲でございません。莫迦に鼻に掛つて宛然人間が變つて居るやうでございました』此んなことを

言つて居ますところへミシリ〳〵と足音がいたし間の唐紙をサッと開けて又右衛門入つて來た 又『エヘン、櫻井。イヤ甚左甚助。暫くであつたな。イヤ何も驚くには及ばん。荒木だ、又右衛門だ。燒いて食ふ煮て食ふとは決して申さん。是れから先は夫婦同樣、兄弟同樣、親子同樣仲好くいたさうではないか。お前も乃公も一遍は本多の家に事へ圖らずも共に浪人となつた。是れも何かの深い緣だらう。此の上は末長く交つて貰ひたい。イヤナニ櫻井。凡て客の來たときには酒を出すものだ。早く酒と肴の支度をしなさい。其んな忌な面をしちやア不可んぜ』煙に卷かれて櫻井兄弟は半平に言付けまして酒を調へ飲ませまする。音に聞えた大酒の又右衛門、飲むは〳〵日の暮方まで

贅澤を言ひながら飲みまして 又『櫻井。今日はモー大分晩いからソロ〳〵戻らう。又明日やつて來るぞ。刻限も今日の通りだ。來てから酒や肴の支度をしては甚だ待遠である。何うせ來ると極つて居るのだから前以て支度をして置いてくれ。此の儀確と賴み置くぞ。おさらば』ト歸つて行きました。其の後で櫻井兄弟は散々半平に小言を言つたが所謂後の祭で何の役にも立たん。荒木が彼樣は言つたが眞逆明日は來はすまいと思つて居ります。翌日晝前になつてチリン〳〵と鈴を振つて煮豆屋が通りまするとその後から又右衛門が

又『エヘン。櫻井甚左甚助は居るか。荒木だ、又右衛門だ。燒いて食ふ煮て食ふとは決して申さん。お前と乃公とは夫婦同樣、親子同樣、兄弟同樣切つ

ても離れ難い仲である。サー頼み置いたる通り支度は出來て居るか。今日は緩りと飲まう』又其の日も暮方まで飲んで種々贅澤を言つて歸りました。後では兄弟が　櫻『甚助』甚『ハイ』櫻『何といたしたら宜いだらう』甚『全く困りましたナ』櫻『此の鹽梅では是れから毎日飲みに來るに違ひない。酒だからといつて却々安からんことだ』甚『御尤でございます』櫻『何か宜い工夫はないものか』甚『兄上。私に宜い考がございます』櫻『ウム何んな考だ』甚『此の大阪には達衆といふものがございまして頼んだ事は何でも嫌とは言はず强い者を倒し弱い者を助けるといふ江戸で申すところの町奴。渡邊橋の向ふに有頂天の九郎兵衛といふ大親分がございますから其所へ行つて一つ頼みませう』櫻『何う

いふことにして頼むのだ』甚『左樣ですナ。夫れは何とか甘く話し込みませうが何卒三十兩だけお出しを願ひます』櫻『ウム。それは却々大變なことだナ』甚『三十兩といふと大變なやうですが毎日ポツ〳〵飲まれることを考へますると却つて安揚りかも知れません。夫れに今日の場合少しぐらゐの金錢に代へられん都合もございますから……』櫻『夫れは大いに然うだ。では何分宜しいやうに頼む』甚『委細承知いたしました』翌朝になると甚助は三十兩の金を懷中に入れて渡邊橋を渡り左へ折れると荒い格子が嵌つた家がある。女の掃除と違ひ荒男の掃除でございますから塵一本其邊に殘してありません　甚『御免。お頼み申す』△『イヤお出でなさいまし。何か御用でございますか』甚『拙

者は大和屋と申す貸席に居る櫻井と申す者であるが有頂天の親分のお宅は此方か』△『戯談言つちやア不可ません』甚『ハー夫れでは違つて居るかナ』△『九郎兵衛親分の家は此所ですが有頂天といふのは家の親分が人に物を頼まれると夢中になつて肩を入れる。そこで世間の惡口に九郎兵衛は有頂天だ〳〵と綽號をしたんだ。其の本人の家へ來て有頂天といふ奴もねエもんだ』甚『イヤ夫れは〳〵。存ぜんものだから飛んだ失禮を申した。シテ九郎兵衛親分は居られるか』△『親分は家に居ますよ』甚『宜しくお取次を願ひたい』△『エー親分へ。大和屋といふ貸席に居る櫻井といふ武士が來て親分にお目に掛りてエと申します』九『ウム。何だか知らんが此方へお通し申せ。博奕打は禮儀を知らねエもんだと思はれちやアならねエ。丁寧に疎忽のねエやうに氣を著けてお通し申せ』△『ヘイ……親分がお目に掛ると申しますからお上り下さい。博奕打だつて禮儀を知らなかアねエんです。丁寧に疎忽のねエやうに氣を著けてお上んなすつて……』此の野郎餘程分らない奴だと見えます。甚助は案内に連れて奥へ通つて見ると親分と覺しきは年の頃四十八九、モー五十でもあらうといふ赭ら顔のデップリとした男。年齡からいふと少し頭の毛が薄い。イヤ薄いどころではない是れも性分であらうが前の方はスッカリ禿げて後の方に僅か毛が殘つて居るのを丹念に髷に結ひ宛然豆腐屋の金柄杓へ燈心蜻蛉が止つたやうだ 九『これはお出でなさいまし。私が九郎兵衛でございます。何

ういふ御用でございますか』甚『イヤ親分でござるか。拙者は櫻井と申すもの。折入つてお願ひ申したい次第があつて突然推參をしたのでござる。實は拙者兄弟は當時貸席大和屋に居りますところ毎日々々押掛けて來ては酒を飲み肴を食ひ散し揚句の果には金を貸せ貸さねば亂暴狼藉を働く者があつて如何ともいたし方がございません。何うか貴所のお手を以て此の者が再び參らんやうにお計ひを願ひたいのでござるが何と御承知なすつて下さいますまいか』九『ヘー夫れでは毎日々々押掛けて來て酒を飲み肴を食ひ散し揚句の果には金を貸せ貸さねば亂暴狼藉をすると仰しやるか。其んな無法者なれば上にお役人樣がある。何故お役人樣へお願けなさらんのでございますか』甚『サー夫

れがチト表向にいたし難い。此方も少々身分がありまするゆゑ……』九『アー夫れでは何ですか遠縁續きといふやうな人ですかね』甚『ハー左樣で。實は遠縁の者で……』九『何ういふ御縁續きになつて居るのですか』甚『されば兄の妻の母の實家の弟の養子に參りました先の……』九『マー〳〵お待ち下さい。大分入り組んで何が何だかサッパリ分らねエ。夫れでは一口に言へばマー親類うちの厄介者と斯ういふんですね』甚『左樣々々。親類うちの厄介者に相違ございません』九『宜うがす。頼まれた以上には屹度やります。シテ其の人は力のある人間ですかい』甚『されば力が有ると申せば有るやうな無いと申せば無いや。うな……』九『劍術はチットは出來るんですか』甚『されば劍術が出來るといへ

ば出來るやうな出來んといへば出來んやうな……』九『ぢやア尋常の力で一通りは劍術も使へると斯ういふんですね』甚『左樣々々』九『イヤ宜うがす。屹度受合ひませう。夫れに就いちやア私は構はねェが若い者に一杯飲ましてやつておくんなさい』甚『早速の御承知辱なうござる。是れは甚だ輕少であるが……』ト懷中から三十兩出して遣つた 九『コラ〳〵野郎共。櫻井の旦那からお土産を頂いた。此所へ來てお禮を申上げろ』甲『へイ何うも有難う存じます』乙『旦那何うも有難う存じます』丙『有難う存じます』九『ところで櫻井の旦那其の男は毎日參りますかい』甚『左樣。毎日必ず參つて日が暮れると立歸ります』九『然うですか。では今夜は酒を充分に飲まし醉つ拂はせて歸しておくん

なさい。何うしても醉つてる方が行り宜うございますから』甚『委細承知しました』ト充分打合せが出來ましたから甚助は急いで歸つて來ました。お話變つて櫻井甚左衛門は一人家に待つて居りまするとチリン〳〵と鈴の音がして例の煮豆屋が通る。それから暫く經つと 又『エヘン。櫻井甚左甚助は居るか。荒木だ、又右衛門だ』ト又例の如く入つて來ました 又『酒と肴の仕度は出來て居るか』櫻『ハイ調へてございます』又『ウム良し〳〵。今日は甚助は何うした』櫻『天滿の天神へ一寸參詣に行きました』又『天滿の天神へ何ういふ了見で參詣に行つたか』櫻『別に何ういふ了見もございますまいがマー荒木先生。其んな事は兎も角一つお相手をいたしませう』荒木は甚左衛門と對向で頻に

飲んで居ります。程なく立戻りましたる甚助『是れは荒木先生能く入らつしやいました。兄上只今戻りました』又『イヤ甚助戻られたか。聞けば天満の天神へ參詣に參つたさうだな』甚『左樣でございます』又『貴公のやうな了見方の違つた者が天神へ參詣いたして何に相成る。心だに眞の道に叶ひなば祈らずとても神は守らんだ。自分の身に邪曲があつて神信心をしたとて何の利益があるものか莫迦々々しい』甚『是れは先生怪しからんことを仰しやる。櫻井甚助此の上もない正直者でございます。サー手前もお相手をいたしませう。何うか緩りと召上つて……』ト兄の甚左衛門に目付を以て知らせまして頻にサー先生サー先生と盃を差す。又右衛門は引受け〳〵幾らでも嫌とは言はず

例の通り暮合まで飲み續けましたることにて流石の荒木も餘程酩酊の體でございます又『イヤ櫻井。今日は酔つた。斯う酔つては宅まで歸るのが誠に難儀だ。今夜は此所へ泊つて行くぞ』甚『荒木先生。お泊んなすつては困ります』又『ナニ困る……』甚『イエナニ困ることはありませんがお宅で待つて居られませう。又明日といふ日がございますから兎に角今夜はお歸りなすつて明日又お出掛けが宜うございます』又『夫れも然うか。人のいふことも少しは聞くものだといふから今夜は歸るとしやう。アー酔つた〳〵。櫻井アバヨ』ヒョロリ〳〵と千鳥足、隈なく冴え渡りましたる月に嘯きながら渡邊橋へ掛つて參りました。此のとき彼方此方の木蔭に潜み居たる九郎兵衛の子分二十何人

△『來たぞ〳〵。ソレ行れッ』ト言ふを相圖に一人の子分、バラ〳〵ッと驅けて來てドーンと突當つた　甲『ヤイ人に突當りやがつて何とか言はねエか』又『イヤ酩酊いたして居るから勘辨してくれ』斯う下手に出られては喧嘩にもなりません。又左の方から一人がバラ〳〵ドーン　乙『ヤイ突當つて物を言はねエのか』又『ウム又突當つたか。醉つてるから勘辨してくれ』右の方から一人がバラ〳〵ドーン　丙『ヤイ〳〵突當つて物を言はねエのか』又『能く突當る晩だ。醉つて居るから御免よ』最後に後から一人がバラ〳〵ドーン　丁『ヤイ突當つて物を言はねエのか』又『一寸待て。いくら乃公が醉つて居てもマサカ後へ歩く氣遣ひはない。後から來て突當れば突當つた方の奴が惡いのだ。

是れは何うも詫るわけにはいかん』丁『何を吐しやアがるんだ。ソレ行つちまへ』ト言ふと忽ち現れ出でたる大勢、手に〳〵得物を取つて前後左右から烈しく打込んで來ました。又右衛門は素早く下駄を脱ぎ一足後へ退つて帶の間に差して居りましたる恩師讓りの鄕の吉範の鐵扇、親骨は南蠻鐵、金を以て「降ると見ば積らぬ先に拂へかし雪には折れぬ青柳の枝」と象嵌のございます鐵扇を取つて右左へ打拂ふ。子分の手並を手緩く思ひましたか有頂天の九郎兵衛、四谷丸太を諸手に揮つて　九『野郎覺悟をしろ』ト打込むところをヒラリ體を轉してヤッと打つたる名人の一打。小手が麻痺れて九郎兵衛脆くもホロリと丸太を取落す。こは殘念と組付いて來るのを襟首へ手を掛け、ヤッ、

ズドーンと投げ出して其のまま馬乗りに蹈み跨り。又『コラ貴様は此の狼藉者の首領か。ヤー〳〵小奴輩共。安りに立騒がば首領と頼む此の者の命はないぞ。手出しをせねば命は助ける。見受けるところ其の方共は達衆のやうに思はれるが此の大阪で乃公の顔を見知らぬ達衆なら潜りだ。乃公は聊か人に意恨を受ける覺えはない。全體乃公を大阪天満に道場を開いて居た浪人剣士荒木又右衛門と知つて打つて掛つたか知らずに打つて掛つたか』九『エッ。ヤー是れは先生でございましたか』又『ナニ。貴様は誰だ』九『私は九郎兵衛でございます』又『何だ九郎兵衛だと』襟髪へ手を掛けて引起し又『此の野郎。師匠に對し手向をするとは何たる不埒な奴だ』九『何うも先生面目次第もございま

せん。平に御勘辨を願ひます。あン畜生奴とんだ事を言つて來やがつたものだ』又『一體是れは何うした譯だ』九『實は晝間大和屋といふ貸席に泊つて居る櫻井といふ浪人が參りまして毎日酒を飲んで其の揚句に金を貸さなければ暴行るといふ實に始末にいけねエ者が來て困るから何うか再び其の者が來んやうに片付けてくれいと頼んで金を三十兩置いて行きました。夫れは嘸困るだらうと可哀相に思ひましたから宜しと引受けて此所に待伏をして居たのでございます。今考へて見ると訳しな事を言ひましたよ。其の人は力があるかと問へば有るやうな無いやうなと言ふし剣術が出來るかと問へば出來るやうな出來ぬやうなと言ふし又遠縁續きの者だと言ふから何んな續合かと聞けば兄

の家内の母の實家の弟が養子に行つた先の何だか愚にも附かぬ事を言ひました。サー斯うなれば先生へ申譯に是れから大和屋へ蹈込んで……』又『イヤ待て九郎兵衛。こりや面白い事が出來た。其の方に儲けさしてやらう。明日の朝成るだけ早く大和屋へ子分を遣はしてお賴の一件は昨晩戻り道を待伏して決行けたが存外の手利で子分の者が大勢傷を負ひ最後に親分が丸太を以て向ふ脛を引拂ひ簀卷にして重量を附け渡邊橋から投り込んだから御安心なさい。然し劍術が出來るなら出來る力が有るなら有ると初から言つてくれればは其の心算で支度をして行つたものを有るやうな無いやうな出來るやうな出來んやうな曖昧なことを言はれた爲大層怪我人を拵へました。何卒療治代を

お貰ひ申したいとモー二十兩も取つて來い』九『其んな事をして宜しうございますか。先生が生きて居らッしやるんですが』又『イヤ其所が面白いのだ。死んだと思ふ又右衛門が明日行つて又脅して一杯飲む』又右衛門も却々人が惡い。そこで九郎兵衛の子分は翌朝右の如く大和屋へ來て申込む。全く又右衛門は殺されたものと思ひ櫻井兄弟大いに喜んで言ふがままに二十兩の金を出しました。

第七席

又右衛門を簀卷にしたといふのて櫻井兄弟非常に喜びまして 甚『ナン上兄上

實に宜い鹽梅にまゐりましたな。モー是れで荒木が押掛けて來る心配もなく大きに氣樂になりました。一度に五十兩掛つたといふと大變のやうでございますが毎日來ては愚圖られると思へば却つて安いものでございます。モー今日からは、誰も參りませんから枕を高うして寢られます』櫻『然し甚助。乃公は何うも荒木が又來るやうな心持がしてならん』甚『夫れは毎日來て居たものですから其んなお心持がするのでございませうが今度來れば幽靈でございますよ』櫻『それなれば至極結構だが……オヤ何だか足音が荒木のやうだぞ』又『エヘン。櫻井甚左甚助は居るか。荒木だ、又右衛門だ。お前と乃公とは兄弟同樣、親子同樣、一夫婦同樣……』甚『オヤ荒木先生』又『何がオヤだ。毎

日來るに極つて居るのだ。サー酒と肴の支度は出來て居やうナ』櫻『只今申付けます』又『毎日來るに極つて居るのに何だつて今日は支度をして置かないのだ。サー早く支度をしろ。然し今日は昨日のやうには醉つ拂はんぞ。餘り醉ふと歸りが危いからナ。乃公は昨夜酷い目に遭た。マ聞け。昨夜歸りに渡邊橋へ掛ると右左から幾人も突當り最後には後から來て突當つた奴がある。何の此奴等多寡の知れたものだと思つて縱横無盡に打ち倒して見たが醉つて居ては何うも不可んものだ。七八人も遣つ付けるうちに四谷丸太で向脛を拂はれて顚倒り返つたところを滅茶〳〵に毆られたから叶はない。流石の又右衛門もトー〳〵簀卷にされて重量を附けられ渡邊橋からドンブリと投り込ま

れて水底へ沈んでしまつた』甚『御戯談を仰しやいますな。貴郎のやうな強い お方が其んな事のある譯はございません。夫れに川底へ沈んだものが何うして此所へいらッしやいました』又『サー夫れが不思議だ。何でも川底へズーッと沈んで行くと大きな龜の子が一尾泳いで來て高手小手にヒシ〳〵と縛つてある繩を食ひ切つて又右衛門さん私の脊中へお乘んなさいと言ふから其の龜の子の脊中へ乘ると何うも其の龜の子の泳ぎ方の早いこと忽ちの間に何百里來たか向ふに見えるのが龍宮城。鯛や平目が門番をして居る。乙姫といふ綺麗な女が大勢の供を連れて出て來て、お前はんは荒木の又さんと言ひなますか。一遍は逢ひたいと思つて居たんざます。能く來てくんなました……』甚『御

戯談ばかり仰しやる。其んな事があるものでございますか』又『何にしろ昨日のやうには醉つ拂はんぞ……イヤモー大分に飲んだ。今日は是れで止めやう。又明日來るぞ。アバヨ』ト歸つて行つた。其の翌日も又其の翌日も毎日續けて必ず遣つて來る。櫻井兄弟は大いに閉口し櫻『甚助。貴樣の計略は一つとして碌なことはない。達衆を頼むなどと言つて一度に五十兩といふ大金を取られ夫れて何にもならんではないか』甚『イヤ何うも全く弱りましたナ』ト兄弟は額を鳩めて思案最中。△『お頼み申す。お頼み申す』甚『ドーレ……是れは何れからおいでござる』△『拙者は江戸表三番町阿部四郎五郎屋敷より罷り越したる竹内玄丹と申す者』甚『夫れは〳〵宜うこそ。先づ〳〵此方へお通り下

さい……イヤ始めて御意得申す。拙者櫻井の舍弟甚助でございます』甚『これは〳〵。扨拙者此の度罷り越したる次第は餘の儀でもござらん。殿樣仰せられるには又五郎警固の武藝者三十六人、御身等二人が加はれば夫れにて頭數が相揃ふ。御身等は又五郎と續合の者なれば魁掛けて參られねばならん筈。然るに再三書面を以て申送るも只近々伺ふとか追つて馳せ參ずるとか仰せられるのみにて果じのないこと。依て其の方迎ひに參り來れとの仰せを受けて罷り越したる次第。サー早速御同道下さい』櫻『夫れは御苦勞千萬に存ずる。拙者共に於ても先頃中より一日も早く參りたいとは心得て居りますが種々已むを得ぬ事情がこれあり……』竹『イヤモー今日は事情などを彼れ是れ仰せ

られる場合でない。他の者よりは緣故も深き御兩人早速御同道下さい』甚『然らば悉しいお話をいたすが實は荒木又右衛門が云々斯樣々々で……』竹『アハ〳〵是れは驚き入つたことだ。斯く御兄弟揃つて居られて荒木又右衛門が何故恐ろしい。第一左樣な者を生かして置いては將來の爲に相成らん。其の又右衛門を何故お切捨てなさらんか』櫻『イヤ誠に面目次第もない事でござるが我々兄弟には迚も及びません』竹『ウム宜しうござる。然らば竹内玄丹がお引受けいたさう。自慢を申す譯ではござらんが世の人々から鬼と呼ばれた此の玄丹。腰に佩びたる池田鬼神丸の一刀に手を掛けたが最後、荒木又右衛門と申す武藝者如何に剛勇なりとも首を胴へは附けて置き申さん』櫻『夫れは千

萬辱ないことでござる。甚助。何いふ都合にいたさう』甚『左樣でございますな。兄上夫れでは斯ういたしませう』櫻『ウム何ういたすのだ』甚『荒木を新地へ引張り出し一夜愉快をいたさせませう。而して曉六つだと欺いて一時早く引出し竹内氏に高敎寺邊りで待伏をして居て頂いては何うでございませう』櫻『ウム。然し甚助。夫れは又散財だナ』甚『今更散財を厭つては居られません。今度こそは必ず片付きませうから……』櫻『然らば左樣いたさう……イヤナニ竹内氏。只今お聞きの通り今晩荒木を新地へ引出し曉六つと申欺いて一時早く引出しますから貴殿は高敎寺の堤にお待ち下さい』竹『委細承知いたした』甚『何卒お手ぬかりのないやうに……』竹『イヤ拙者の方は決して御心

配に及ばん』ト素晴しい元氣で歸つて行きました。軈て例の刻限になると又右衛門又『エヘン。櫻井甚左甚助は居るか……』トやつて參りまして例の通り盃を重ねます。程好き頃を見計らつて甚左衛門櫻『荒木先生。我々兄弟は浪人をいたして後未だ一度も遊興をいたしません。就いては今晩新地へ參り久々にて愉快を盡したいと存じまするが何と御同道下さいませんか』荒木が又『イヤ夫れは不可ん。懷中が暖かければ隨分行つても宜いが金がなくては行つても詰らん所だからナ。拙者は止めるよ』櫻『夫んな事を仰しやいませんで何うか是非御同道を願ひたい。何うも兄弟が差向ひではチト行き兼ねる所でございますから枉げてお願ひ申します』又『夫れ程頼むなら行つてやつても

宜いが乃公を主人にして貴公等二人は家來になつて行くか』甚『先生。家來は酷いぢやアございませんか』又『酷ければ止さうよ。何も強て行きたくはないのだから。何所までも乃公を主人にするなら行つても宜い』櫻『では宜しうございます。我々兩人が家來となつて參りませう』又『ウム。然う極つたら直に出掛けやう』櫻『新地の酒は又別段に不廉うございますから飲むだけは此方で飲んで行きませう』又『イヤ貴公達は然う吝嗇だから困る。固より無駄な金を使ふ場所ぢやないか。先方へ行つて酒も飲まんで何の樂がある。サー早く出掛けやう』ト無暗に荒木が急ぐものだから櫻井兄弟も夫れではと支度をいたし大和屋を立出で三人打連立つて新地へ來ると又右衛門は井筒屋といふ家へ

いきなりズーッと飛込んでしまつた。後から來た櫻井兄弟は此んな大きな家へ入つては豪い散財になつて困ると思ひましたが何うも仕方がないから續いて上りました。又右衛門は手をポン〳〵と叩いて　又『サー酒と肴をドン〳〵持つて來い。何でも甘いものが澤山なくつては不可ん。而して家の者を殘らず是れへ呼べ』甚『先生。其んな大きなことを言つては困りますナ』又『イヤ構はん。ドン〳〵持つて來い』甚『ソー澤山持つて來んでも宜いよ』又『イヤ澤山持つて來いよ。此の兩人は身共の家來だ。主人の言付を背いてはならんぞ』女『畏りました。御主人が持つて來いと仰しやるのを御家來はんの癖に何故其のやうに吝いこと言やはるのや』櫻井兄弟は亂離骨灰三文の價値もありま

せん。段々盃も重りまして其のうちにお退けと相成る。甚助は又右衛門の敵娼を小陰へ呼びまして明朝七つが鳴つたら曉六つだと言つて一時早く起して呉れ。遲くなると屋敷の方の都合が惡いからと賴む。又右衛門は敵娼の座敷へ來ると今まで泥のやうに醉つて居りましたのがキチンと床の上へ坐り直して『イヤ寢衣は著替へんでも宜い。種々と世話を燒かして氣の毒であつた。是れは少いが白粉なと求めて呉れるやう……』ト金子を三兩出して與つた。又『就いては相尋ねるが連の者兩人から何か賴まれた事はないか』斯う尋ねられては何んな太夫さんでも饒舌る譯でございます。何故なれば先方は客齒の握り拳、此方は氣前よく三兩といふお金が出ましたから太夫『實はお連の

お方から曉六つと僞り一時早くお起し申してくれるやうにと賴まれました』又『ウン然うか。私は側に女が居ると疳の故で寢られん。何所へなと行つて寢て來てくれ』ト言ふ。珍らしいお客があればあるものと思つた。二歩出すから他へ行くなと言ふのはチヨイ〳〵あるが三兩出して他へ行つて寢てくれと言ふ人は未だ出會したことがない。又右衛門は一人でグツスリ寢込んだが軈て七つの鐘が鳴ると櫻井がやつて參りました 甚『エー荒木先生。荒木先生』又『オー何だ』甚『曉六つでございます。お目覺を願ひます』又『莫迦を言つちやア不可ん。今寢たばかりだ。未だ曉六つになる筈がない』甚『イエ只今曉六つでございます。障子を開けましても宜しうございますか』又『ウム開けても

苦しうない』甚『サー先生歸りませう』又『何うだ甚助。太夫の言ふには今日は是非流連をして行つてくれろと……』甚『イヤ流連といふのは野暮の頂上でございます。今日は一旦歸りまして又折を見て參ることにいたしませう』又『然うか。何うも殘念だが是非に及ばん。然らば歸るとしやう』トそこ〳〵に支度をいたして表へ出ると未だ四邊は眞暗又『何だ櫻井。是れでモー曉六つか』甚『左樣でございます』又『大層暗いてはないか』甚『夜の明ける前には一旦又暗くなるものだと申します』又『夫れにしても餘り暗過ぎる。それに世間も森としして居る』甚『ハテナ。先生事に依ると一時間違へましたかも知れません』又『ナニ間違へた。櫻井、人を莫迦にしては不可んぜ。一時間違へられて堪

るものか。モー一度戻つて寢るとしやう』甚『夫れは先生困ります。一旦出たものだから今更戻るといふ譯にもまゐりません。私が提燈を借りてまゐります』又『女郎買に來て提燈を借りて歸れば世話はないが……アー眞實に借りて來たな』甚『サー出掛けませう』又『何うだ甚助。昨夜の工合は』甚『イヤモー上出來でございました』又『嘘を吐け。貴公が遊女に厚遇る譯がない』甚『先生は酷いことを仰しやる。然し夫れは又何ういふ譯でございます』又『何故でもない名前からして甚助といふてはないか』甚『御戯談を仰しやいます』ト無駄話をしながら段々差掛つて來たのが高敎寺の堤。躓いた態をして甚助が提燈の火をパッタリ消しました甚『アッ。荒木先生。困つたことが出來ました』又『何

だ甚助。何で提燈の火を消したのだ』甚『何で消したつて先生。一寸石に躓いた途端にツイ消えてしまつたので。モー直に明るくなりますから暫く御辛抱なすつて下さいまし』又『弱つたな。燧石があるだらう。早く點けたら宜いだらう』ト言ふうち暗きに紛れて一足駈拔けた甚助。四邊を憚る小聲にて甚『竹内氏』竹『ハー』甚『それにお居でであるか。あれへ參るのが荒木又右衛門でござる』竹『委細承知いたした』又『オイ〳〵甚助。何所に居るのだ』甚『ハイ此所に居ります』又『何をグヅ〳〵話して居るのだ』甚『イエ。何も話しては居りません』又『何しろ暗くて些とも分らん。早く燧石を出して提燈に燈火を點けてくれ』甚『モー先生直に明るくなりますから夫れには及びますまい。少しの間

我慢を願ひます』又『イヤ燈火がなくては一歩も歩けん』ト一際聲を張上げる。其の聲を目當に差し足拔き足伺ひ寄つたる竹内鬼玄丹。池田鬼神丸の一刀に手を掛けて引拔くよと見るとき早し 竹『荒木覺悟』ト切り付けました。チヤリーンと拔き合した音が聞えたばかりで跡はシーンとして何の物音もない。暫くあつて櫻井兄弟は 甚『兄上』櫻『オー甚助』甚『何ういたしたのでございませう』櫻『されば何うしたのであらう。ガタとも音がせん』甚『私の考ではチヤリーンと拔き合したとき竹内玄丹が又右衛門を切つた。夫れと同時に又右衛門が玄丹を切つて結局合打の共斃れとなつたのかと思ひます』櫻『いかにも其んな事かもしれぬ』甚『兎に角一つ呼んで見やうぢやございませんか』櫻『夫れ

が宜からう』甚『先へ何方を呼んで見ませうか』櫻『サー先づ荒木の方を呼んで見たが宜いだらう』甚『エー荒木先生。荒木先生』ト呼んでも返事がありませんー甚『兄上。是れは占めましたな。兩人相打になつたに違ありません。然し念には念を入れよだからモー一遍呼んで見ませう。荒木先生』又『オーイ何だ』甚『アッ……何所にいらッしやいます』又『此所だ〳〵』甚『何か出たやうでございましたナ』又『出たとも〳〵。何うも大變なものが出た』甚『何でございました』又『イヤ何だか知らんが變なものが出たから蹈潰してしまつた』甚『エ。蹈潰したと仰しやいますか』又『イヤ驚くには及ばん。能く取調べて見るから一寸待て』又右衛門先生煙草入から燧石を取出しましてカチリ〳〵と火を點

ける又『イヤ是れは硫黄がないから不可んが……ソラ見ろ此所に仆れて居る』甚『アー分りました〳〵』又『脆い奴だ。蹈著けた機會に氣絶したと見える。マー夜の明けるまで斯うやつて置いて能く面體を見てやらう』櫻『荒木先生。是れは屹度人違ひか何かでございませう。剛勇無雙な先生と知つて切り掛るものは恐らくござるまいから人違ひでなければ狂人でありませう。斯樣な者は許しておやりなすつて此のまま御出掛けが宜しうございませう』又『イヤ人違ひでも狂人でも一つ間違へば此方は生命を取られてしまはねばならん。マー〳〵此所で一ぷく喫んで夜の明けるのを待つが宜い』ト悠然と煙草をくゆらせ其の吸殼を竹内玄丹の耳の中へはたいた　櫻『イヤ先生。是れは熱うござ

いませう』又『氣絶して居りや死人同樣だ。ナニ熱くつても構ふものか。サー甚左甚助。貴公達も一ぷく點けるが宜からう』氣の毒千萬だとは思ふけれども櫻井兄弟已むを得ず耳に入つて居る火玉で煙草を喫ふ。玄丹こそ宜い面の皮だ。又右衛門は煙管で玄丹の頭をポカ〳〵打ちながら又『何といふ格好の惡い煙草盆だらう……アーいよ〳〵東が白んで來た。ソロ〳〵面體を拜見してやらうかな』ト襟首に手を掛けて引起し小首を傾けて熟々面を見詰めて居りましたが軈て又『ウム』ト點頭きエイッと一聲活を入れました。氣息吹き返したる竹内玄丹、四邊キョロ〳〵見廻して居たが荒木の顏を見るや一目散に逃げ出さうとするを又右衛門取つて引据ゑ又『汝は竹内玄丹だな。我未だ

丑之助といひし昔、恩師十兵衛先生眼病平癒のお禮參りとして日向の國法華岳寺へ赴きし途次、山中に於て賊に出逢ひ手下の者四五人を取つて投げ棄てしが最後に現れたは汝玄丹、其の時生命を斷つべきのところ面魂といひ腕前といひ一廉見込ある者と思ひ眞人間になれと意見を加へて許し取らせた。然るに又々今日此所に於て我に切つて掛るとは再生の恩をも知らぬ憎き奴。尤も彼の節は丑之助今は又右衛門、或は心付かんであつたかも知らん。助けついでにモー一度は助けて遣はす。今度不埒の行爲あらば其の時こそは命がないぞ。今日の事は恐らく其の方の腹から出たのではなからう。他に賴人があるに相違ない』ト言ひながら櫻井兄弟の顏をジロリと見遣り又『行けッ』

ト襟髪掴んでドーと投げ出しますれは猫に追はれた鼠のやうに玄丹後をも見ずに雲を霞と逃げて行きました。又右衛門は塵打ち拂ひて又『アハ〳〵〳〵』櫻井。世の中には莫迦な奴があるものだナ。あんな者の言ふことを信用して大切な金を使ひ捨てるとは實に莫迦氣た話だ。サー歸つて緩り朝酒を飲まう』櫻井兄弟は第二回の計略もマンマと手違ひに及び又右衛門は毎日々々やつて來ては太平樂を列べて例の如く飲み倒す。甚左衛門も近頃はモー氣根が盡きて茫然として居ります『櫻』甚助。モー何うも是れでは遣りきれん。毎日飲み倒されるのは先づ宜いとしても斯う荒木に附け廻されて居ては何時まで待つても東へ發足は出來ん。實に困つたな。何とか宜い工夫はないものか』甚『兄

上。今度こそは私が大丈夫受合といふ計略を工夫いたしました』櫻『又始めたナ。其の方の工夫に一つも當つたのはないぜ』甚『イエ今度のは決して間違ありません。諸葛孔明 楠 正成たりとも恐らく考へ著かんといふ妙策で……』櫻『何ういふ計略だ』甚『是れを名づけて燈臺下暗しの計略といふ……』櫻『大層効能書は立派だが全體夫れは何ういふのだ』甚『夫れではお話いたしますが先づ私が泉州の堺まで一寸行つて參ります』櫻『フーン』甚『而して良い宿屋を一軒搜しまして武士の相宿は一切しないといふ約束をいたし其の代り一日一兩の茶代を出すとにして我々兩人其所へ姿を匿します』櫻『ウム成る程』甚『いよ〳〵約束が出來ましたところで荒木が例の如く來て酒を飲んで歸る。其の

後で直に支度をして泉州の堺へ逃げてしまひます。翌日になつて荒木が驚き近所で樣子を聞くが分らない。扨は江戸へ逃げたに相違ないと江戸を指して追驅けて參ります。其の間此方は緩り妙國寺の蘇鐵でも見物をして夫れから悠々と東海道を下つて行かうといふ是れが卽ち燈臺下暗しの計略でございます』櫻『ウム成る程。夫れなれば首尾能く行くかも知れん。何うか早速取掛つて貰ひたい』そこで甚助泉州の堺へ赴き龜屋德右衛門といふ宿屋へ參つて武士の相宿なし一日一兩の茶代といふ約束で十日分十兩の金を拂ひ受取を取つて歸つて來る。それから又右衛門を充分に馳走いたして歸し其の後で大急ぎに泉州の堺へ立退きます。翌日になつて又右衛門相變らず來つて見れば櫻井

兄弟は藻拔の殼。家主に尋ねれば江戸表へ向け出立したとのこと。扨は江戸へ逃げたなと直に己の宿へ取つて返し數馬伊兵衛に支度をいたさせ中仙東海の兩道に別れて追驅ける心算。然るところへ泉州の堺まで用達しに行きましたる北堂武右衛門が戻つて來て龜屋德右衛門の門口で見覺えのある櫻井の槍が立て掛けてあるのを見て來たといふ武右衛門の一言から茲に又櫻井の計略露顯をなし泉州堺の龜屋德右衛門方へ又々荒木又右衛門乘込んで來て兄弟の荒膽を取挫ぐ。斯の如く致した末遂に櫻井兄弟一時荒木の目を遁れまして三州片濱に赴き三十餘人の中に加はり河合又五郎を警護いたし伊賀越をして九州へ送らうといふ途中、所は伊賀の上野鍵屋が辻金傳寺門前に於て出會を

いたし茲に又右衛門は數馬を助けて首尾能く仇討本懐を遂げるといふ本講談の結局今一席を以て讀み盡します。

第八席

扨いよ〳〵河合又五郎の一行は伊賀越をいたすといふことが相分りましたから荒木又右衛門より藤堂家の家老梶原源左衛門へ當所通行の際取逃さんやうに餘所ながらの助勢を頼み込みます。此の源左衛門は義心鐵石の如き人でございますから早速御主人藤堂大學殿へ委細の事情を訴へ出でまするとと大學殿に於ても應分の助勢を與へてやれよと仰せられます。そこで御鹿狩のお催があるといふ名目にして上野の城下は勿論、御領分内の出口入口等總て勢子に扮装ちたる兵士を以て嚴重に固めさせ一度此の中へ入つたが最後、袋の鼠同様で出ることが出來ないやうにしてしまひました。斯ことは夢にも知らず又五郎を護衛なしたる三十餘名の武藝者は注意に注意を加へて段々伊賀路へ立入つて參りまするとと當御領内は御鹿狩といふことでございます。然し自分等の爲の鹿狩とは更に氣が著きませんから一向平氣でございます。時は寛永十八年十一月十八日の朝。お城下鍵屋が辻に金傳寺といふ寺がある。此の境内へ參つて本堂を借り暫く此所に休息をしやうといふ考でございます。此方は豫て用意を整へ勇氣を練つて此の寺に待ち受けて居るのが荒木又右衛門ハ渡邊

數馬、北堂武右衛門、山添伊兵衛の四人。時に又右衛門におきましては又『コレ北堂。其の方と山添の兩人は決して數馬の傍を離れてはならん。三人は只又五郎を取逃さんやうに努めるが肝腎。其の餘の者は縱ひ三十人五十人來ると雖大言ながら此の又右衛門一人にて引受ける』といふ立派な一言に山添北堂も大いに勇氣附き既に各身輕の支度をいたして待つて居るとは露知らず又五郎の一行は靜々と是れへ入つて來た。此のとき又右衛門は金傳寺の藪蔭の方へ廻つて其所よりヌックと立現れ突然に又『櫻井』ト大きな聲を揚げた。甚左衛門甚助の兩人は『アッ』ト驚き向ふの方を見てあれば是はそも如何に是は如何に充分に支度をなしたる荒木又右衛門義村又『如何に甚左衛門甚助。

其の方共の來るを此所に相待つこと既に久し。ソレ數馬伊兵衛武右衛門』ト目配をいたしまするこ三名バラ〳〵ッと其所へ立現れ忽ち又五郎の駕脇へ迫つて來た數『ヤー〳〵父の敵河合又五郎。乘物から出でて尋常に勝負に及べ』ト大音聲に呼はる。伊兵衛武右衛門の兩人も聲を揃へて兩人『我々兩人若旦那のお助太刀をいたす。サー乘物から出て尋常に勝負をしろ』是れを聞いてアッと驚いたる河合又五郎。周圍を取卷いて居た劍士の人々は『ソレ又五郎の駕籠を逃がせ』ト下知をいたして駕籠を袋町の方へと落します。後より數馬が數『卑怯なり又五郎。返せ戻せ』ト追駈ける。北堂山添の兩人も數馬に續いて追駈ける。然るに劍士の人々は昨日まで各鎖帷子を著込み身支度を嚴

重にして居たところ一行の中に川田勇吉といふ者があつて最早是れまで來れば大丈夫とスッカリ支度を解いてしまつた。之に倣つて多くの武藝者皆普通の旅裝になつてしまつたからイザといふ時に充分の働が出來ない。是れは第一席に述べましたる如く桑名の船場で荒木に助けられた川田勇吉が其の時の恩に報いる爲に敵方に交つて居て荒木に夫れとなく便宜を與へたのでございます。ところで劍士の人々に於ては元より警固の約束で雇はれて來たのだから支度が充分でないといつて今更逃げる譯に行かない。夫れに相手は頗る小勢にて荒木一人が如何に剛勇であつてもソーく身體が續くものではない。腕を現すのは此の時だと各刀をキラリくと引拔きます。中にも櫻井甚助

は扨こそ又右衛門先へ廻つて此の所に待受け居たか。怨重る憎き奴。イデ仕留めて高名せんと豫て用意の半弓を取出しガッチリ矢を番へて又右衛門目掛けて三筋ばかり射掛けましたが既に度胸が狂つて居るから狙が著かない。射掛けた矢は殘らず逸れてしまふ。又右衛門ニッコリ笑ひ又『不憫ながら一命は貰つた』ト言ふ聲諸共躍り込んでヤッと切下したる柳生流の腕前、何かは以て堪るべき櫻井甚助肩口をシタタカに切り附けられ『アッ』トいふとバッタリ倒れて息は絶えた。是れを見たる櫻井甚左衛門携へ持てる槍を扱いて櫻『ヤー弟の敵荒木又右衛門。能くも是れまで我々兄弟に對し樣々の無禮を働きをつたな。覺悟をいたせ』ト突掛け來る槍先を心得たりと打拂ひ二三合打合つ

て居るうちに甚左衛門が焦つて突出す槍を又右衛門ポンと刎上げ再び繰込まうとするところを其の槍に密接いて甚左衛門の手許へ飛込んだ。全體槍といふものはモー手許へ飛び込まれては何とも仕方のないものださうでございます。『エイッ』ト一聲又右衛門が一文字に拂ひましたから甚左衛門は片足を切り取られドッとばかりに倒れるところを起しも立てず又『汝に對面するも是れ限りだ。永々大層馳走に相成つた。何れ又冥土に於て對面に及ばん』ト切下したる光世の名刀、其のまま甚左衛門は落命に及びました。此の時ワーワッといふ勇ましい聲が上つた。是れは豫て藤堂家より手配りいたし四邊の口口を固めの人數が其れへ一人切倒される度毎に聲を揚げて又右衛門に勇氣を

附けまするので現今ならばフレーー〜又右衛門とても申すところでございませう。是れよりいたして又右衛門はいよ〜大勢の中へ切り入つたる樣子。太守大學殿に於ては御櫓にお上りに相成つて遠眼鏡を以て始終城下の樣子を御覽になつていらつしやる。梶原源右衛門は馬を東西に乘り廻して餘所ながら又右衛門主從に助勢をいたす。藤堂家の手配は實に萬事に能く行屆いて居ります。扨又右衛門におきましては勇氣日頃に十倍なし三十餘人の武藝者を相手にいたし少しも恐れず此所を先途と戰つて居ります。其のうちに横合から一人跳り込んで來たのは大森藤馬と名乘る一刀流の劍客、刀を上段に振り被つて又右衛門に切り込んで來た。又右衛門心得たりと體を開き二三合打合

つたが迚も荒木の腕前に叶ふ譯はありません。又右衛門が跳り込み一聲叫んで切下した一刀は大森藤馬の額から眞ッ二つに切り割り鼻が二つに割れ咽喉も二つに割れ胸も二つに割れ臍まで二つに割れた。御城下の町人は皆屋根へ上つて之を見物して居てワイ〳〵言つて大騒をして居る。此の時又右衛門後の方を振返つて見ると河合又五郎の影が見えないのみならず渡邊數馬を始め北堂、山添の兩人も何所へ行つたか姿が見えないから又右衛門心の中に大層氣遣つて居ります。其のうちに大約十五六人の劍客ドット喚いて一度に切り込んで來た。心得たりと又右衛門、右に潜り左に拔け前に在るかと思へば忽ち後に顯れチヤリン〳〵と切合ふ早技は陽炎稲妻水の月實に目にも留らぬく

らゐにて瞬くうちに七八人切り倒しましたので殘りの者は此の勢に辟易なし言ひ甲斐なくもバラ〳〵と逃げ出した。一方には河合又五郎、駕舁人足を急がせてドン〳〵と逃出しましたが人足もモー足へ凝りが來て思ふやうに歩けない。動ともすると駕籠を投り出さうとする。夫れを又五郎が駕籠の中から叱つて一生懸命袋町の方へ逃げて來るを『卑怯し返せ』ト呼はりながら後から追掛けて來たのは數馬に武右衛門伊兵衛の三人。袋町の入口に於てトー〳〵其の駕籠を取巻いてしまつた。モー斯うなつては逃げる譯に行かず又五郎は駕籠の中では働くことが出來ないから據所なく駕籠を下させやうとすると未だ下せと言はないうち駕籠舁人足は自分達の足でも拂はれては堪らない

からドーンと夫れへ駕籠を投り出して一目散に逃げてしまつた。然るに宜い塩梅に其の駕籠が横にも倒れず大地へ落ちたから又五郎イキナリ乘物から跳り出でました。元來此の人は槍を能く使ふけれども生憎槍持が其所に附いて居ないから仕方がない。手早く羽織を脱いで襷を掛け一刀を引拔いて渡邊數馬と切合を始める。武右衛門伊兵衛の兩人は茲ぞ大事の場合と左右に附添ひ若し數馬が危くなれば直に助太刀に出やうと各一刀を引拔いて身構をして居る。話變つて旗本の附人三十六人のうち無念流の劍客齋藤一角といふ人、一刀を引拔いて又右衛門の面前に跳り出で名乘を上げて切つて掛つた。又右衛門心得たりと一角を相手に切り結んだが此の一角は却々腕が出來る。加之に

他の者が言ひ甲斐なくも又右衛門只一人に切り立てられたのを見て甚く憤激いたし既に充分決死の覺悟に及んだと相見え侮るべからざる烈しい働をいたします。流石の又右衛門も之が爲に少しく切り立てられて居るところへ馬を飛ばして驅けて來たのが梶原源右衛門『アイヤ又右衛門殿。何故あつて一人の敵の爲に猶豫なされるや。只今袋町に於て數馬殿と又五郎と手詰めの勝負をいたし居る。早くお駈付けなさらなければならん』此の一言が又右衛門には大層力になりました。先づ齋藤一角が打込み來る太刀を打拂つて置いてヤッと飛び込みエイと切下したる一刀は一角の肩先四五寸ばかり切下げたから堪らない。一角が『アッ』ト言つて退るところを又もや飛び込んで横に拂つ

た一文字、憫れむべし齋藤一角胴體二つになつて倒れたり。又右衛門始めてホッと息を吐いて、又『梶原氏。シテ勝負は如何に』『梶』又五郎も必死の場合なれば勢却々鋭く動ともすれば數馬殿は危い體に相見えた』又『そは一刻も猶豫ならず。然らば是れより袋町へ……』『梶』サー〳〵早く參られよ。我等は馬にてお先へ參る』ト梶原源左衛門ドシ〳〵乘出して行きました。そこで又右衛門も馬の後を慕つて袋町を指して乘込んで行かうとするところへ我孫子彌之助、今井白翁軒の兩人立現れ左右より又右衛門に切つて掛る。荒木は數馬の方が心配になるところであるから又『エー汝等は敵討の邪魔をいたすか』ト光世の一刀を振上げて左から來た白翁軒の切込む一刀を受流し蹌踉くところ

ろを飛び込んで右の腕の附根から切落した。是れはモー一番大丈夫でございます。刀を持つたまま腕が無くなつたのだから何うしたつて働くことは出來ません。其の隙に我孫子彌之助が卑怯にも後へ廻つて又右衛門の脊筋から切込まうとするところを早くも體を轉したから彌之助は一刀を持つたままヒョロ〳〵と辷つて來る。夫れを又右衛門足を揚げてドッと蹴たから前へバッタリ倒れるところを眞ッ二つと切込んだることにて二言といはず息絶えたり。そこで又右衛門は數馬の樣子が氣になつて堪らんから袋町の方を指して大急ぎに乘込んで來る途中沙入町の角の所まで來ると其所に井戸がございます。多勢を相手に長らく戰つたることゆゑ又右衛門咽喉が渇いてならない。幸ひ

四邊に人影も見えませんから水を一口飲まうといふので釣瓶を汲上げて居ると此の汐入町の角に湯屋があつて其の湯屋の側に薪が山の如く積んである。其の薪の蔭に一人隠れて居たのが矢張り旗本から附けられて河合又五郎警固の一人安井甚太夫といふ奴。是れは豫て荒木の腕前に怖れて居るから戰が始るや否や其所を逃げ出し縱ひ後日お咎めがあらうとも其の時は又何とか言譯が立たんこともあるまいと息を殺して小さくなつて此所に隠れて居た。ところが今又右衛門が直目の前の井戸へ來て水を汲んで飲まうとして居ますから安井甚太夫は是れ天の與へなりと喜んで差し足拔き足縞かに荒木の後へ廻つて來た。又右衛門は漸く水を汲み揚げ嗽をして居るところで固より後に目が

ないから甚太夫が出て來たのは更に氣が著かない。然るに市街の町人達は皆戸を閉めて屋根へ上つて見物をいたして居るので此の邊にも其の連中が澤山あるから△『ヤー後へ廻つた〳〵』ト聲を掛けました。又右衛門此の聲に驚かされてヒヨイと振向いて見ると武藝者が一人今しも切込まうとして居る。又『汝ッ』ト言つて又右衛門が體を轉しさま釣瓶の水をザブッと頭から打掛けた。甚太夫不意に水を浴びせられてヤッと驚き後へ退るところを蹈み込んで又右衛門足を上げて蹴つたから安井甚太夫バッタリ其所へ倒れる。其の上へ又右衛門馬乘に打跨り　又『縱ひ浪人なりとも汝も武士ではないか。何故尋常に名乘つて勝負をいたさん。欺し討とは卑怯な奴だ。汝のやうな未練者を

刄物を以て討取るときは恩師十兵衛先生より頂戴いたした光世の穢れと相成るから斯の如くにいたしてやる』ト荒木は馬乗に跨つたまま甚太夫の咽喉の邊りへ膝を掛けて力任せにウーンと押した。又右衛門は武藝に達して居るばかりでなく頗る大力でございますから堪りません甚太夫はシタタカ血を吐いて死んでしまつた。又右衛門は思はぬ邪魔に時刻移り數馬の身の上心許なしと身繕ひもソコ〳〵に袋町指して飛んで行く。話變つて河合又五郎は絶體絶命の場合いたし方なく右手には北堂武右衛門、左手には山添伊兵衛、正面には渡邊數馬、此の三人を相手にいたし病中ながらも必死と相成り一進一退五分の戰をして居るところへ梶原源右衛門馬を飛して乗込んで來た 梶『ヤー

〳〵數馬始め武右衛門伊兵衛に申す。荒木又右衛門に於ては三十六人の武藝者を殘らず切つて捨て只今直に此の所へ罷り越す。又右衛門是れへ來らざるうちに早う又五郎を討取つてしまはッしやい。三十六人を殘らず切つて捨てたる又右衛門に又々手を借りて又五郎を討つは武士の耻辱だ。速に片を附けてしまひなさい』ト大きな聲で怒鳴つた。是れを聞いた爲に又五郎大いに勇氣衰へ數馬主從三人の太刀先が非常に鋭くなつて來た。然し又五郎に於てはセメテ數馬だけなりとも冥途の道連れに是非連れて行かねばならんと思ひまするから却々激しく切込んで來る。斯るところへ韋駄天の如く飛んで來たのは南條彌五平といふ神影流の達人 南『河合氏。心配なさるな。三十六人の武藝

者のうち未だ〳〵生き殘つて居るものが大勢あるから又右衛門は急に此所へは參らん。其の間に此奴等は拙者が引受け一刀の下に切つて捨てる』ト言ふ聲を聞いて又五郎又々勇氣を取返した。此の時山添伊兵衛が進み出で『ヤー仇討の妨害なす奴は拙者が相手をしてくれん』ト流石は荒木先生多年の仕込みだけあつて暫くの間は切合つて居たが何をいふにも劍術の段が違ふから仕方がない次第に腕が亂れて來て惜むべしトー〳〵伊兵衛は落命に及んだ又五郎は是れに一層勢を得て數馬目掛けて切つて掛る。其のうちに彌五平は『サー數馬といふ小童。拙者が相手をしてくれる』ト忽ち數馬に切込んで來る。斯うなつては數馬は又五郎と戰つて居るわけにまゐらず是非なく彌五

平を相手にしなければなりません。されば北堂武右衛門と河合又五郎と切合ひ南條彌五平と渡邊數馬と切合ふことになつたが悲しいかな數馬は力が及ばない。次第々々に受太刀となつて後へ〳〵と退りながら心の中ではアー世の中に神も佛もないものか、此の場に於て返討になるとは情ないと涙を飲んで打合つて居ります。北堂武右衛門も數馬の身を案じるところから兎角氣が引けて是れも追々受太刀になる。又五郎は得たりと笠に掛つて切込んで來る。此方は荒木又右衛門、袋町へ入らうとする所で梶原源右衛門に出會ひ此の樣子を聞いて喫驚なし飛鳥の如く駈付けると今や數馬は南條彌五平に切立てられ既に危く見えたるところであつた。又右衛門天地に響けと大音揚げ『ヤ

一〜數馬。氣を確かに持て。荒木又右衛門是れへ乘込んだり』是れを聞いたる數馬は千人力を得たるが如く、兄上何卒お助太刀下さいと言はんとすれど聲も出ず一心凝つて戰つて居ります。時に南條彌五平は『南』聞き及んだる荒木とは汝のことよナ。さらば先づ其の方の息の根を止めてくれん』ト又右衛門の方へ向つて來た。又右衛門サー來い來れと切合つたが此の彌五平なかなかの腕前であるから體を轉じて荒木の手許へ飛び込み足を拂はうと取直したる一刀、サッと横に拂つたところを又右衛門は大兵肥滿ではあるが武藝を以て鍛へ上げたる身體、パッと一丈も飛び上つたと思ふと其の足が地に附かないうち切下したる見事の一刀に彌五平の身體は二つになつて倒れました。

數馬は南條を荒木に任して置いて再び當の敵たる又五郎の方へ掛つて來るうちに南條彌五平が又右衛門の爲に切られたので大いに喜んだ。又右衛門はモー此所で數馬に又五郎を討たせれば心願成就、夫れには又五郎に一刀浴せて手傷を負して置いて弱つたところを數馬に討たせやうかとも思ふ。斯るところへ眞赤になつて走せ來つたのが山田眞龍軒、東屋五郎兵衛、竹内鬼玄丹の三人。東屋五郎兵衛が第一番に又右衛門へ切付けるを又右衛門體を開いて蹈込みながら横に拂つた一刀に五郎兵衛脆くも首を刎ねられた。是れを見て山田眞龍軒、竹内玄丹は左右より一時に切つて掛る。又右衛門は玄丹の顏を見るより『汝は竹内玄丹だナ。約束通り今度こそは助けんぞ』ト切込む太

刀先鋭くして忽ちのうちに眞龍軒は胸板を切られてアッと倒れた。之を見る
と玄丹バラ〳〵と逃出します。又右衛門は『ヤー〳〵卑怯なり玄丹。汝の
命を取らで置くべきや』ト追駈ける。其所へ源右衛門が乗付けて來て 梶『荒
木殿。數馬の方が愈々危い。其んなものは打捨て置いて早う〳〵』ト言はれ
るので又右衛門再び引返して來る。數馬は之に力を得て一生懸命此所を先途
と切込んで來たのが一心の徹つたものかトー〳〵又五郎の左の肩先へ三寸ば
かり切付けた。又五郎ダヂ〳〵と後へ退りながら横に拂つた一刀で數馬は危
く足を拂はれんとしたところへ北堂武右衛門跳り込んで切付けるを又五郎體
を捻つて空を打たせ打下したる一刀を武右衛門受損じたから堪らない憫む べ

し眉間を三四寸切下げられてダヂ〳〵と後へ退る。ところを蹈込んだる又五
郎、覺悟をしろと切下し武右衛門の右の肩先を深く切付けた。此の時數馬は
太刀取り直し跳り込んで再び又五郎に浴せ掛けた。又右衛門此の樣子を見て
モー數馬が太刀を附けて居るのだから自分も光世の一刀を振つて又五郎の左
の肩先へ切付ける。流石の河合又五郎も重傷に堪へずバッタリ其所へ倒れる
ところを數馬が飛び掛つて 數『汝ッ』ト言つて止めを刺さうとするから又右
衛門が 又『イヤ待て數馬。最早斯ういたしたる上は急くには及ばん。充分に
是れまでの怨を述べて止めを刺せ』數『有難う存じます』ト言つたが數馬は全
身に籠めたる力が緩んだと見えて思はずドーと其所へ倒れ胸へ波を打たせて

苦む樣子。又右衛門之を見て　又『アー今まで張り詰めた氣が緩んだものと見える。數馬。止めを刺さんうちは未だ氣を緩してはならん。戰場で敵の首を取つても名乘りを揚げぬうちに相果てては功名にならんぞ。戰場と思へ。氣を確かに持て』ト言はれて數馬は氣を取直し再び立上ります　又『サー急いてはならん又五郎は未だ息はあるがモー何うすることも出來んのだ』又右衛門倒れて居る北堂武右衛門を見るとモー蟲の息ばかりだ。そこで向ふの方に倒れて居る山添伊兵衛の死骸を夫れへ持つて來て聲を張上げ　又『如何に武右衛門、伊兵衛も魂魄此の土に在るならば能く又右衛門の申すことを聞け。其の方共長年の間數馬に附添ひ艱難辛苦いたしてくれた甲斐あつて今日只今伊賀

の上野の城下に於て見事仇討本懷を遂げた。河合又五郎は渡邊數馬が正に止めを刺す。是れを冥途の土產にいたせ。伊兵衛。武右衛門』ト呼はつた。時に山添伊兵衛の方はモー全く絕命いたして居ましたが北堂武右衛門は其の聲が耳に通じたものと見えましてパッチリと眼を開いてニッコと打笑つたのが此の世の別れ其のまま瞑目いたしてしまつた。數馬は此の樣子を見て　數『アー是れまでに盡してくれたる忠義の二人を此所でムザ〳〵失ひしは返す〳〵も殘念千萬だ』ト悲歎の涙に暮れまするうち又右衛門が　又『サー〳〵數馬。止めを刺しませい』數『畏りました』ト茲で父を殺されたる恨を充分に述べ懷中より紙位牌を取出しまして數馬が先に止めを刺し續いて荒木が同じく止め

を刺す。其の間梶原源右衛門は馬を乗違へ乗返して居りましたが茲にいよいよ止めを刺したる様子を見ると扇をサッと開いて『梶天晴々〳〵。サー〳〵一同賞めろ〳〵』ト言ふから警固の人數は勿論屋根へ上り物干へ上つて見て居た町人共までが一度にドッと賞める聲は山に響き谷に應へて暫時は鳴りも止みません。軈て町奉行鈴木權右衛門といふ人が八十人の部下を引連れ其の場へ乗込んで來て段々死骸を檢めます。其のうちに竹内玄丹は逃げやうとして逃げる道なく遂に縄目の恥を受けて引立てられた。實に何うも武士の恥辱である。又右衛門此の趣を承つて又『玄丹は元山賊を働いたる兇惡無殘の者である。斯樣な奴を生け置いては今後何を仕出かすか知れんから事の序に討

取つてしまひませう』ト言ふを梶原源右衛門押し止め『梶イヤ此奴一人は生して置かなければ此の度の事の證人がない。一通り吟味をいたした上で兎も角もいたすことにしやう』ト言ふので又右衛門も尤と思ひて之に同意し源右衛門へは此の度の好意を厚く禮を述べ數馬諸共一旦此の所を引揚げました。そして町奉行に於ては鬼玄丹を改めて取調べると全く旗本に頼まれて肥後の人吉まで又五郎を送る約束をいたして來たといふことを白狀に及んだ。此奴は元山賊であるのみならず其の後も種々惡事を働いたことが露見いたし遂に死罪獄門の刑に處せられました。扨仇討は是れにて見事に相濟んだが只惜むべきは北堂山添兩人の落命でございます。此の度の儀に就いては最初より梶

原源右衛門が非常なる骨折でございまして又町奉行鈴木權右衛門も大いに又右衛門等に同情を表し後々の儀を悉く取片附け自出度く茲に事落著に及びました。そこで改めて梶原源右衛門の案内で又右衛門、數馬兩人藤堂大學殿の御前へ罷出でて御禮を申上げる。大學殿に於ても御喜悅の御言葉を下され且兩人を御家臣に召抱へられんといふお望でございましたが是れは何うも然ういふ譯にまゐりません。數馬は因州鳥取の城主池田庄五郎殿へ歸參の上千五百石を以て父靭負の名跡を繼ぎました。又右衛門も繫がる緣に依り千石を以て池田家へ御奉公をいたすことに相成り鳥取に屋敷を構へてお民との間に又之丞といふ子を擧げ又右衛門先生長壽を保つて死去の後、此の又之丞が荒木

の家を相續いたしました。尙樣々申上げる節もございますが紙數に限りもございますから不完全ながら先づ此の邊にて結局といたして置きます。

（秘華小史補正）

荒木又右衛門 終

明治四十三年六月廿三日印刷
明治四十三年七月十二日發行

荒木又右衛門奥附
正價金貳拾錢

不許複製

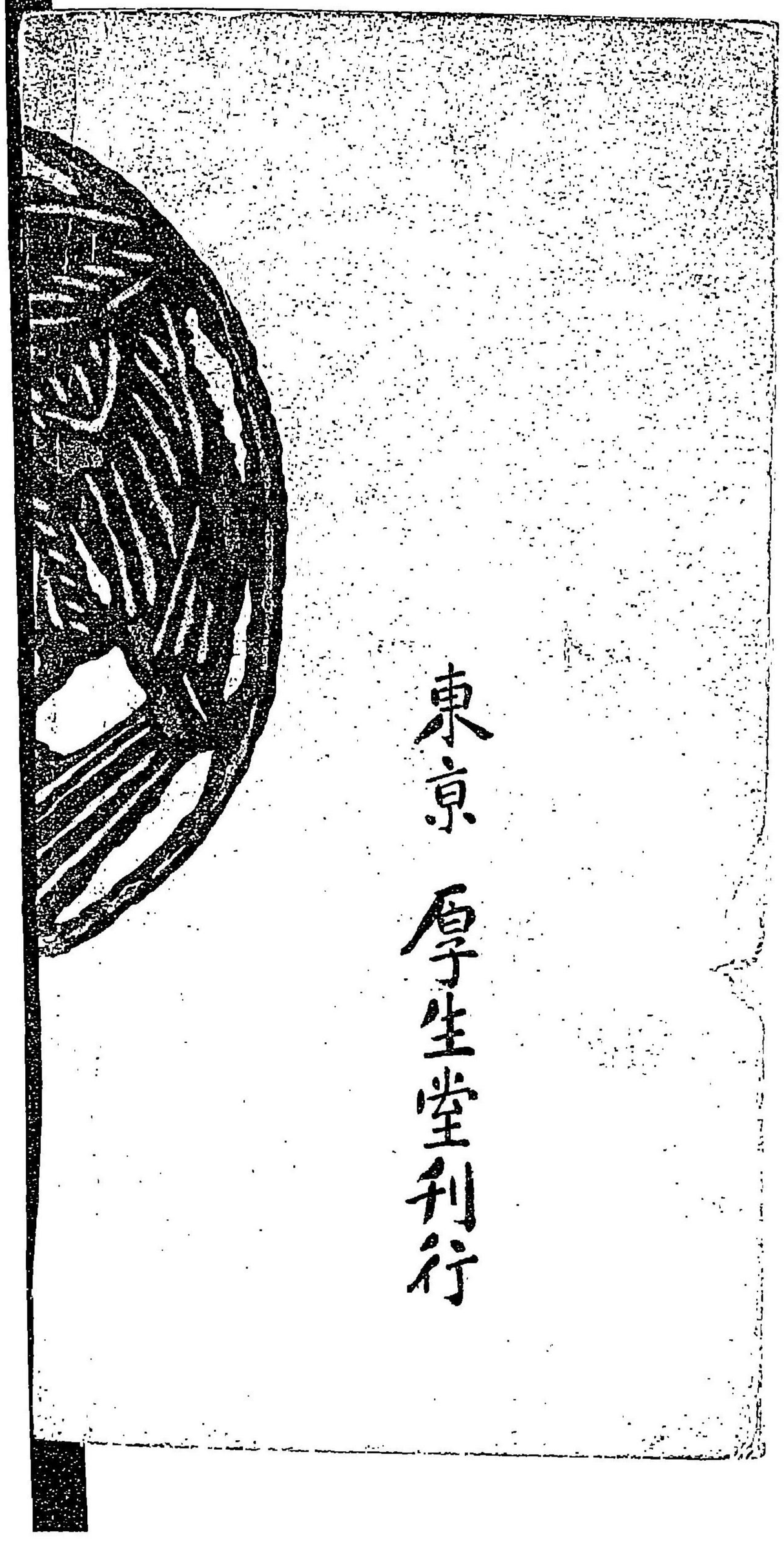
編輯者　厚生堂編輯部

發行及印刷者　東京市京橋區南傳馬町一丁目一番地　相澤富藏

印刷所　東京市京橋區北槇町八番地　厚生堂印刷部

發行所　東京市京橋區南傳馬町一丁目一番地　厚生堂
電話番號本局八三八番
振替口座東京三二八三

264
158


東京
厚生堂刊行